寅さんの社会学 Ⅱ

竹原　弘

はじめに

本稿は「男はつらいよ」論の最後の部分である。本稿は今まで述べて来た事を踏まえて、一応結論めいた事を述べようと思ったが、明確な結論は結局出なかった。

最初に今まで述べた社会についての定義を再び取り上げて、それらを関連付けて論じた。すなわち意味、行為連関、交換システムの相互関連性についてである。結局交換システムが社会の構成において、最も根源的な物であり、それが意味を特定の場所に集合せしめ、また行為連関を形成し、システムの機能を果たさせる。

そうした事を踏まえて、社会を時間性の角度から考察する。すなわち先に述べた時間性の定義、つまり時間とは人間に依る意味への行為に基づき、或る意味への行為から別の意味への行為において、人間は現在を乗り越えて、現在を過去へと追いやり、また未来を現在へと到来せしめる。そうした時間性を社会と言うフィルターで見ると、時間性とは社会の中に何らかの差異を導入せしめることである。そして交換システムはそうした差異の社会への導入をより体系的に行う。歴史とは差異の差異化であり、それは時間軸での差異化であると共に、空間軸での差異化である。時間軸での差異化とは歴史のプロセスでの差異の差異化であり、空間軸ではそのような差異の差異化によって生み出さ

二

れた多様な意味に基づく、人間の行為形態の多様化であり、それは社会的には分業と言う形で現われる。

そして最後に寅次郎の時間性の特徴について述べて、「男はつらいよ」の社会学的な特徴について述べる。寅次郎は結局交換システムによって規定されないで、自らの時間性を行使するが故に、それは特定の方向性を持たず、それ故に彼は多様な人間との出会いを経験し、それを通して多様な交換システムを開示せしめる。

本稿の構成は次の通りである。

【1】 意味の集合態としての社会の再検討
【2】 行為連関としての社会の再検討
【3】 交換システムとしての社会の再検討
【4】 時間的差異としての社会
【5】 寅次郎の時間性の特徴

Ⅲ 「男はつらいよ」の社会学的特徴

最後に社会についての定義を再検討して、それに基づいて『男はつらいよ』の社会学的特徴を述べたい。既に、社会とは①意味の集合態である、②行為連関である、③交換システムである、と定義された。これら一つ一つの定義を再び取り上げて、再検討して、社会、あるいは社会的行為とは何かを明確にして、それに基づいて映画『男はつらいよ』の社会学的特徴について述べたい。

【1】意味の集合態としての社会の再検討

既に述べた様に意味の集合態としての社会と、意味への行為の連関とは密接な関係が有る。すなわち、意味はそれが意味として社会の構成契機である限りは、それへの行為を促し、またそれへの行為を完成させなければならない。つまり意味が社会の中でその場所を獲得しているためにはその意味への絶えざる行為が為されなければならない訳である。意味とそれへの行為とはこのように密接な関連性が有る。

或る意味への行為がもはや為されなくなると言う事は、それが社会を構成する契機ではなくなる事を意味する。例えば、刀はかつては武士にとっては必要不可欠な物であった。武士は常に刀を身に携帯していなければならなかった訳であり、それは武器であると共に武士と言う社会的役割の象徴の様な物であった。ところが武家社会が終焉を迎えると共に刀と言う有意味的な物への行為も終焉を迎えた。つまり武家社会が終わると共に、刀への行為も終わったのである。すると、刀は社会を構成する契機である事から脱落して、その姿を社会から消す。現在でも刀は有るが、それはかつての時代に刀が持っていた意味とは全く異なる意味を持っている。つまり、現在の社会では刀は一部の人にとって骨董品的な意味を持つ物として、社会の中で細々と存在しており、それはかつての時代の様な行為をそれを持つ人に促さない。

ここで意味についての新しいテーゼを一つ提示しよう。つまり意味への行為自体が一つの社会的行為である、と言うテーゼである。何故意味への行為が社会的行為であるのか。或る意味へと行為する事が出来ると言う事は、その人が何らかの形で社会化されている事を意味する。例えば、目の前に有るコップの中に入っているジュースを飲むために、コップを手に取り、それを口まで運んでコップの中のジュースを口の中へ入れる。そのことによりコップと言う意味を有する物への行為を完成させる事が出来るのである。その何でもない行為が何故社会的行為なのか。コップと言う物が持つ意味を把握して、それへと適切に行為する事が出来ると言う事は、その人が社会化されているからであ

三

四

る。つまり、その人が人間の社会の中で人間によって育てられて、人間の社会の中で適応出来る様になる事が社会化と言う事である。コップの持つ意味を把握して、それへと適切な行為を為す事が出来ると言う事は社会化が為されている事によって初めて可能なのである。

パーソンズは社会化について次の様に述べている。

「社会化的機能とは、簡略に言えば、個人の内部に将来の役割遂行の要件として不可欠なコミットメントならびに能力を発達させることである。」（T・パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』）

コップの意味を把握して、コップの中に入っているジュースを飲むと言う簡単な行為がそうした社会化の結果、あるいは成果であるとどうして言えるのであろうか。

有名な「アヴェロンの野生児」は一八〇〇年一月九日に、南フランスのサン＝セルナン村の近くの森で発見された。直立歩行しているにも拘らず、その生き物は人間よりも動物に近かった。しかしすぐに十一、十二歳くらいの少年と特定された。明らかに身の回りについての衛生観念はなく、したい時にしたい場所で排便や排尿をした。少年は徹底的な医学検査を受けたが、主な異常は見られなかった。

その後、この少年はパリに移されて、「野性から人間へ」変えるために、系統的な試みが為された。その試みは部分的には成功した。少年は用便の躾けが身につき、服を着ることに順応し、自分一人で服が着られる様になった。しかし、玩具や遊戯には興味を示さず、二、三の単語以外に言葉の修得は全く出来なかった。この少年はその後これ以上の進歩を殆どしないで、一八二八年に死亡して、年令は推定四十歳ぐらいだった。（A・ギデンズ『社会学』）

この「アヴェロンの野生児」の例は社会化についての問題に大きな示唆を与えてくれる。アヴェロンで発見されたこの少年は、先に述べた社会化がされていなかったが故に、人間社会の中に適合する事が出来なかったのである。この少年が人間によって発見されて、人間社会の中に適合させる努力が為されたにも拘らず、この少年は完全には人間

社会の中に適合する事が出来なかった。

従って社会化の条件は、人間の手によって人間社会の中で育てられると言う事であり、その事によって初めてコップの意味を理解し、コップと言う有意味的な物へと適切な行為を為す事が出来るようになるのである。従って、コップの中に入っているジュースを飲むと言う行為は、我々人間社会の中で人間の手によって育てられた者にとっては、ごく日常的な行為であり、何ら特別の行為ではないが、しかしそうした行為が可能であるのは、我々が社会化されているからである。つまり人間社会の中へと適合出来る様に訓練されているからである。

それ故に、コップの中に入っているジュースを飲むと言った行為の様なごく普通の日常的な行為が社会的行為なのである。あるいは我々の周囲に有る諸々の有意味的な物を、それとして理解出来るし、それらへと適切な行為を為すと言う事が社会的行為なのである。何故ならば、先にも述べた様に、そうした行為を為す事が可能であるのは、我々が社会化されているからであり、アヴェロンの野生児の様に、人間社会と隔絶された場所で育てられたならば、社会化されていないために、そうした日常的行為が出来ないのである。

ジンメルは、スペンサー等の社会の実体化に対する批判として、「社会とは相互作用の総体に対する名称にすぎない」（ジンメル『社会学的心理学的探求』）と述べているが、社会化が社会を構成する意味への適切な行為が可能になる事であるならば、社会的行為を意味への行為であると定義しても良いだろう。つまり、ジンメルが言う様に、社会的行為を他者との相互作用であるとする以前に、意味への適切な行為であると定義しても良いであろう。

すなわち社会的行為とは、社会の構成契機である意味への適切な行為である。あるいは意味の集合態としての社会の中に自分を組み込ませる事、つまり社会を構成している諸々の意味へと適切に行為して、自らの行為を完成することが社会的行為である。

先に諸々の物が担っている意味は何らかの行為を誘発すると述べたが、我々の様々な行為はそのように社会を構成

五

している諸々の意味に触発されて生ずる場合が多い。あるいは行為の動機である様々な欲求、欲望は意味から生ずる。つまり、様々な欲求や欲望が我々の中で生ずると言う事は、そうした欲求や欲望は社会に由来するのであると言う事を意味する。我々の中で生ずる諸々の欲求や欲望は、我々の中の願望だけから生ずる事は無い。

だから我々が何らかの意味へ向かって行為を為して、そのことによって行為を完成する事は、意味によって触発されたものであり、そして意味が社会を構成する社会の構成契機であるならば、結局そうした行為は社会によって生み出されるのであると言う事になる。

それ故、我々の意味への行為が社会的行為であり、もっと複雑な社会的行為の原型を為していると言える。

【2】行為連関としての社会の再検討

意味とそれへの行為とは相互依存的であり、両者が相俟って両者の存続が可能である、と言う事については既に述べた通りである。そこで行為連関についてここで再検討してみよう。既に述べた様に、行為は意味によって触発されて、意味へと行為することによってその行為は完成する。先に述べた例で言うならば、コップに入っているジュースを飲みたいと言う欲求は、目の前に有るコップに入ったジュースによって触発されて、それへと手を伸ばして、それを掴んで口に持って行き、それを口の中に流し込むと言う行為によってその行為は完成するのである。

しかしそのコップもコップの中に入っているジュースも、神によってそこに齎らされたのでもなく、コップが何処かからひとりでにそこにやってきたのでもなく、ジュースが何処かから飛んで来て、コップの中に入ったのでもない。ジュースが入ったコップがそこに有り、〈私〉をしてそれへの行為を可能にならしめるのは、それに先立つ何らかの行為連関の結果によってである。

つまり〈私〉の母が近くのスーパーとかコンビニに行って、紙パックに入っているジュースを買って来て、一週間

前に何処かのデパートで買っておいたコップの中に入れて、〈私〉の家のダイニングに有る机の上に置いておいたが故に〈私〉はそのコップでその中に入っているジュースを飲む事が出来たのである。

すなわち、〈私〉がコップに入ったジュースを飲む事が出来たのは、その行為に先立つ行為、つまり〈私〉の母がスーパーやコンビニでコップやジュースを買って来たと言う行為と連関することによって可能なのである。

そして〈私〉の母がスーパーやコンビニでそれらを買ったのは、先に述べた様に、それらに、あるいはそれらが有する意味に触発されて、それらを獲得したい、つまり法的にそれらを所有したいと言う欲求に駆られたからである。

そうした触発によって〈私〉の母はそれらの品物をスーパーやコンビニで購入すると言う行為を為す。品物を購入すると言う事は、購買者が貨幣と言う有意味的な物への行為によって、つまりお金を払うと言う行為によってそれらを買うと言う事である。そこにやはり意味への行為が有る。さらに或る品物を購入すると言う事は、品物を購入する者と品物を売る者との間の相互行為、あるいは行為連関が生ずる事によって可能になる。つまり購買者、あるいは客である〈私〉の母はそれらを買うためにスーパーやコンビニの従業員に金を支払うと言う行為を為して、従業員はその行為と連関する行為として、〈私〉の母にそれらの品物を売る、もっと具体的な表現を使えば品物を渡す。そうした行為連関によって〈私〉の母はそれらの品物を購入する、つまりそれらを法的に自分の所有物にする。

そして〈私〉が〈私〉の家のダイニングでコップに入ったジュースを飲むと言う行為は、それに先立つ〈私〉の母のそうした行為との連関によって可能になるのである。つまり行為連関は意味に基づき、意味に触発されて生ずる。我々の行為が意味に触発されて生ずると言う事は既に述べた。我々の行為が意味に基づくと言う事は、これも既に述べた意味の共有と言う事と関連する事柄である。行為が意味によって触発されて、意味によって完成されると言う事が他者によるその意味への行為と連関すると言う事は、その意味を〈私〉と他者とが共有することによって可能なのである。つまり或る意味を〈私〉と他者とが同一の意味として理解することによって、そのような行為連関も可能に

七

なるのであり、意味の共有と言う事が行為連関の前提である。

例えば或る人が〈私〉にコーヒーを入れてくれて、〈私〉がそのコーヒーを飲むと言う行為連関を例に取ると、そうした事が可能なのは、〈私〉と他者とがコーヒーと言う物の持つ意味を共有しているから可能なのである。もし〈私〉がその人が出してくれたコーヒーの持つ意味を理解出来ないならば、〈私〉は相手が〈私〉の前に置いた奇妙な香がする、黒いその液体を飲むと言う行為を為す事を躊躇するだろう。つまりその場合に、他者が〈私〉のためにコーヒーを入れると言う行為が〈私〉がそれを飲むと言う行為へと繋がらないだろう。すなわちそこで行為連関は生じない。

行為連関は意味への行為に基づき、意味を他者へと齎らす事によって生ずる。さっきの簡単な例をもう一度出すならば、誰かが〈私〉にコーヒーを入れてくれる場合に、その人はコーヒー豆とかサイフォンとかその他諸々の有意味的な物の意味へと行為して、飲み物としてのコーヒーを飲める状態にする。そして〈私〉の前に置いて、〈私〉がそれを飲む事を可能にする。つまり飲める状態になったコーヒーと言う有意味的な物を〈私〉に齎らして、〈私〉がそれを飲む事、つまりそれへと行為することを可能にする。そこにおいて或る人がコーヒーを入れると言う行為とそれを〈私〉が飲むと言う行為が連関するのである。あるいは会社で部下が何らかの書類を作成して、それを上司である〈私〉の所に持って来て、〈私〉の決済を仰ぐ場合も同様の事が言える。〈私〉の部下が書類を作成するためには諸々の意味へと行為して、その結果出来た書類を〈私〉の所に持って来る事によって、部下と〈私〉との間に行為連関が生ずる事が可能になる。

そのように行為連関は意味の共有を前提にするが、言語的意味を共有することは必ずしも必要としない。何故ならば、互いに言葉を解さなくても行為連関は可能だからである。例えば、日本人が外国に行って何らかの買物をする場合に、店員と同一の言葉を共有しなくてもそれは可能だからである。勿論言葉を共有しなければならない場合も有る

八

が、それは必要条件ではない。

さらに何らかの意味への行為は直接的には他者に向かう行為ではないが、何らかの形で他者を前提にしている。例えば先程挙げた例を再び取れば、〈私〉がテーブルの上に置いてあるコップに入ったジュースを飲む場合に、その〈私〉の行為は誰かに向かう行為ではなくて、〈私〉の中で充足する行為であるが、つまり〈私〉は〈私〉がジュースを飲む事で満足するのであるが、その〈私〉の行為は〈私〉の母がスーパーやコンビニでコップやジュースを購入すると言う、それに先立つ行為の連関として可能であり、その意味において母の行為の連関として〈私〉の行為は成り立つのである。すなわちその場合に、〈私〉がコップに入ったジュースを飲むと言う自足的行為を為す場合でも、〈私〉は〈私〉のその行為に先立つ、〈私〉の母の行為を前提にしているのであり、〈私〉の行為は直接的には母と関連しないが〈私〉の行為の中で、〈私〉は母を前提にしているのである。

あるいは〈私〉が手紙を書いている場合も、〈私〉が手紙を送る相手は〈私〉の目の前に現前していなくて、〈私〉の手紙を書くと言う行為は相手に直接的に関連しないが、〈私〉の手紙を書くと言う行為において、〈私〉の手紙を書くと言う行為は、〈私〉が手紙を送る相手を〈私〉の行為の中で前提にしているのであり、すなわちその相手が〈私〉が書いた手紙を読むであろうと言う事を前提にして、〈私〉は手紙を書いているのであり、その意味で〈私〉の手紙を書くと言う行為は、〈私〉が手紙を送る相手が〈私〉の書いた手紙を読むと言う行為と関連しているのである。

様々な行為連関は既に述べた様に意味と相関的であり、行為は意味によって規定されており、また意味も行為によって自らの存在を社会の中で維持しているのである。そして後でまた述べる予定だが、行為の形態は意味の配置に規定されている。意味は交換システムによって集合されて、交換システムによって配置される。従って、意味は社会の中での場を構造的に、つまり別の有意味的な物と構造的な関連性をもって配置されている。

例えば、自動販売機は我々の目にはアットランダムに配置されている様に見えるが、それらは自動販売機と言う社

九

会的装置を使って利潤を生もうとする交換システムにとって決してアットランダムな配置ではなくて、構造的な配置であり、利潤を生む空間の産出を為しているのである。そうした自動販売機で何かを購入しようとする者にとって、何かを購入すると言う行為は当然の事ながら、自動販売機の空間的な位置によって規定されるのであり、ビールを購入しようとする者にとっては、ビールの自動販売機の有る場所まで移動しなければならない。そしてそうした行為は当然の事ながら、自足した行為ではなくて、その場所へと自動販売機を配置した何らかの企業の者の行為と、そしてその中に常に販売する商品を補充する行為と連関しているのである。

同じ事は会社や学校に関しても言える。それらは勿論何らかの交換システムであり、従ってそのシステムの目的のために諸々の意味を集合せしめ、そしてそれらを空間的に配置して、意味の空間的な構造をシステムの中に形成する。それらに関わる人々はそうした意味の空間的構造によってその行為が規定される。卑近な例で言うと、六階に仕事場を持つ者にとって、コーヒーの自動販売機が四階に有れば、そこまで下りて行ってコーヒーを購入する必要が有る訳で、その意味において行為は意味の空間的配置構造によって規定されていると言える。

そして既に述べた様に社会は意味の集合態であり、様々な意味はあらゆる所に広がっていると言う事を我々は経験的に知っている。つまり様々な意味は我々が現在知覚し得ない所にも存在しており、それが様々な人の行為を大きく規定している。

現象学的社会学者であるアルフレッド・シュッツは、彼の主著である『社会的世界の意味構成』の中で社会を四種類に分けている。すなわち「社会的直接的世界」「社会的同時世界」「前世界」「後世界」の四種類である。まず「社会的直接的世界」についてだが、シュッツは次の様に規定している。

「ある汝が私と時間的にも空間的にも共存している場合、その汝について私は、汝が私の社会的直接世界に属していると言う。汝が私と空間的に共存しているとは、私が汝を『全身的』に、しかもその人自身として、この独特の汝

として体験しており、また汝の身体をこの汝の豊かな諸兆候の表現の場として体験しているということを意味する。汝が私と時間的に共存しているとは、私が純粋な同時性において汝の意識経過に眼差しを向けることが出来る事、汝の持続が私の持続と同時であること、私達が一緒に年をとることを意味している。」（A・シュッツ『社会的世界の意味構成』）

つまり「社会的直接的世界」とは、私と他者とが同一の空間、あるいは互いに相手の姿が見える範囲の空間に共存している場合の互いにとって現われる世界の事を意味する。つまり互いにとって見える世界が同一である、そのような世界が社会的直接世界である。例えば、〈私〉と〈私〉の妻が同じ部屋に居る場合に、〈私〉と妻にとって、その部屋はシュッツの言う社会的直接的世界である。

そしてシュッツの言う「社会的同時世界」とは、

「ところで直接的世界の内部で示される体験の近さが大なり小なり周辺的であるような定位の成層はいってみれば直接世界の限界を越えて、生身の姿と空間的直接性の彼方にある同時世界的な状況へと続いている。直接的世界と接する中間段階は、微候的充実の減少と、汝の姿が私に与えられる、その解釈のパースペクティヴの活動の余地が縮小することによって特徴付けられる。」（A・シュッツ『同書』）

と言った世界の事である。つまり、空間を〈私〉と共有していないが、時間のみを〈私〉と共有している人と共有している世界の事であり、つまり今と言う時間に何処かに居るが〈私〉にはその姿も見えないし、何処の誰とも分からない人と共有する世界をシュッツは「社会的同時世界」と言った。

つまり現在と言う瞬間に世界の何処かに居る人と〈私〉とは、現在と言う時間は共有して、共に現在と言う時間の流れに身を任せて、同時に年老いていくが、しかし一生の間に互いに合いまみえる事は恐らく無い人と共有する世界をシュッツは「社会的同時世界」と言う。

一一

一二

そして現在生きている人々の殆どとは一生涯逢う事は無いのであるが、そうした〈私〉に対して現前していない人々の行為形態を〈私〉はおおよそ想像することが出来る。シュッツはそれをウェーバーの理念型と言う概念でもって説明する。つまりそうした〈私〉に対して現前していない人々でも、彼等の社会的役割によってその行為の形態がある程度決定される。例えば郵便局の人で手紙等を配達する人は、彼が社会から与えられている独自の行為形態を有している訳であり、そうした行為形態からその人の行為を或る程度予測することが出来るとシュッツは言う。

私の今までの記述の脈絡からすれば、そうした何処かに居るが〈私〉に対して現前していない人の行為形態は意味の広がりと言う事で説明出来る。すなわち、社会の構成契機としての諸々の意味はシュッツの所謂「社会的直接世界」を越えて広がっているのであり、その事を我々は経験的に知っている。つまりシュッツの言う「社会同時世界」に居る人々の行為形態を我々が予測出来るのは、その何処かの誰かと〈私〉とが諸々の意味を共有していると言う事の確信に基づくのである。

その事を深めるために「男はつらいよ」の第十二作目の「私の寅さん」から少し引用してみよう。マドンナは岸恵子だが、マドンナが出てくる前の最初の場面。

久しぶりに柴又に帰って来た寅次郎は、とらやの人々が九州に旅行すると聞いて腹を立てるが、さくらの取り成しで納得して留守番する事にする。

「とらや」・店内

静まりかえった店内。

寅がアクビをしながら階段を降りて来る。

寅　「あー、よく寝たよく寝た。おばちゃん、腹へったよ、飯だ、おばちゃん！（ふと気づいて）何だ、もう行っちゃったのか」

茶の間の卓袱台の上に朝飯の支度がしてあり、紙切れが一枚置いてある。

寅、手にとって見る。

――寅さんへ。行って参ります。留守番をくれぐれもお願いします。今夜宿から電話します。叔父、叔母、博、さくら、満男。

寅、舌打ちしながら紙を取り出し、所在なげにアクビをする。

大分空港

明るい南国の陽射しを浴びて、ジェット機が滑走路にすべり込む。

空港・表

檳榔樹（びろうじゅ）の並木が美しい空港ターミナルからとらやの一家が出てくる。

つね　「あっ！」

急に立停まる。

つね　「今日は保険の集金日だよ。寅ちゃん払っておいてくれるかしら」

さくら「大丈夫よ。私がちゃんとお金預けて来たから」

つね　「……そうかい」

と、なおも不安気に歩いている。

ホーバークラフト
　波静かな別府港を猛烈な勢いで走るホーバー・クラフト。
その中
　飛行機の中のような室内で、とらやの一家、御機嫌である。
大分のホーバー・クラフト・ターミナル
　爆音を響かせながら、ホーバークラフトが地上に上がって来る。
別府の街
　湯煙に霞む温泉街、その向こうに別府港が穏やかに光っている。
高崎山
　海岸に沿った駐車場がたくさんのバスや車でにぎわっている。
同　道
　みやげもの屋がずらりと並んだ道を、少しくたびれた様子のとらやの一家が歩いている。
　竜造、つね、周りに集って来た猿にエサをやっている。
　小さな眼をクリクリさせながらエサを食べている猿。
つね　「ねえ、寅ちゃん、ちゃんとお昼食べたかしら」
竜造　「食べなくたって死にやしねえよ」
　とエサを景気よく猿にやる。
　別の場所で、市の職員の説明をきいている博とさくら。

一四

中　略

「とらや」・庭

縁側にポツネンと座っている寅。

印刷工場の塀の向こうで社長が工員に諭している。

社長　「今行かない方がいい。ひがみっぽくなっているところだから」

寅、竜造丹精の盆栽をぼんやりと眺めている。

杖立温泉（夕方）

山峡に古びた温泉宿がびっしりと並んでいる。

ぐったり疲れた足取りでとらやの一同が歩いている。

同・温泉旅館の一室

思い思いの姿勢で夕食後の一時を過ごしているとらやの一家。

座敷をかけ回る満男。

つねの肩を揉んでいるさくら。

竜造、徳利を前に赤い顔でウトウトしている。

つね　「飛行機に乗って、温泉に入って、御馳走を食べて……本当に言うことないよ、私は」

さくら「あげ膳さげ膳でね」

つね　「そう、極楽だよ。ありがとう、さくらちゃん」

一五

博が手拭下げて入ってくる。

博　「あ、おじさん、風邪ひかないかな」

つね　「放ときゃあいいんだよ。疲れた疲れたって文句ばかり言って。（竜造を指し）ねえ、見てごらん、高崎山にこんなお猿がいなかったかい」

さくら「いたいた。ほら、みんなが一生懸命エサ食べてるのに、一匹だけ何もしないで眼つぶっているの」

博　「あれ、ボス猿だよ」

一同笑うので、竜造眼を覚ましてキョトキョトしている。

つね　「でもおかしかったねえ、あの仲間はずれの猿さ、寅ちゃんにソックリ」

一同、再び笑う。

さくら「ああいけない。そういえばお兄ちゃんに電話するんだっけ。博さん、八時過ぎた？」

博　「とっくだよ」

さくら、受話器をとりあげる。

さくら「もしもし、東京お願いします。……はい、おねがいします」

受話器をいったん置きながら、

さくら「今頃何してるのかしら」

博　「社長と一杯やってんじゃないか」

つね　「そんなとこさ」

竜造　「あ、いけねえ」

博　「どうしたんですか」

竜造　「俺のジョニ赤隠すの忘れて来ちゃった」
博　「それは駄目だ、もう飲まれていますよ」
竜造　「畜生!」
一同、ゲラゲラ笑う。
電話のベルが鳴り、さくらが取りあげる。
さくら「もしもし、はい……あ、お兄ちゃん？　私よ、さくら…えっ」
突然の大声に、びっくりして受話器をはずす。

「とらや」・店内
酒の入った赤い顔で電話に出ている寅。
机の上にはほとんど空になったジョニ赤が置いてある。
寅　「何だよ、お前、何で今頃電話するんだよ。今夜電話するって言うからよ、俺、日暮れからズッとこの電話の傍で待ってたんじゃねえか……」
さくら「ごめんごめん、なにか変わりない？」
寅　「大ありよ。泥棒が入ってな、有金全部持って行っちゃったよ。あ、それから裏の工場から火が出てこの辺みんな焼けちゃったよ。それからな、東京は大地震で全滅よ」

旅館の一室
さくら、辟易している。

さくら「いやねえ、変な冗談言って。……もしもし……もしもし、私達みんな元気でね、楽しい旅行を続けてるわよ」

寅　「あ、そうかい、そりゃ上等だ。――こっちは面白くもねえから一人でヤケ酒よ。ちょっとおいちゃん出せ、おいちゃん」

さくら「はいはい。（受話器をおさえて）おいちゃん、ちょっと出てくれって」

竜造、めんどうくさそうに立ち上がり、受話器をとる。

竜造「もしもし」

寅　「（うれしそうに）よお、おいちゃん、まだ生きてたか。お前のジョニ赤な俺みんな飲んじゃったよ。うまかったぞ」

竜造「（蒼くなって）みんな飲んだ？　だってお前、三分の二は残ってたぞ」

寅　「半分は社長が飲んだよ、アハハ」

竜造「あの野郎……おい、社長出せ」

寅　「タコはゆでダコになって帰ったハハ……」

「とらや」・店内

寅　「おいちゃん、もういいからおばちゃんに変わってくれ、おばちゃん」

竜造、ブツブツ言いながら、受話器をつねに渡す。

つね「もしもし、私だよ」

寅　「おばちゃん、どうだ、楽しくやってるか」

つね　「おかげさまでね、私しゃ天国にいるような気分だよ」
寅　「そうかい、そりゃあよかった」

旅館の一室

つね　「これもね、さくらちゃんや博さん、寅ちゃんのおかげなんだよ。本当にありがとう」
寅　「そうか、そうか。――ちょっと博呼んでくれ、博」
　博、受話器を取る。
　さくら、早く切れと目くばせしている。
博　「もしもし、ぼくです」
寅　「よお、博か、お前にはいろいろすまねえことしたなあ。お前のおかげで老い先短けえ老人夫婦があんなに喜んでたよ。どうもありがとう」
博　「いいえ、とんでもありません。それじゃ兄さん、長くなりますから、このへんで」
寅　「ちょっと待てよ、まだいくらも話してねえじゃねえか。あと誰かいねえか、そうだ満男がいるじゃねえか。満男だせ満男」
博　「そうですか、じゃあ、ちょっとだけ。――おい満男、寅おじさんだよ」
　一同、ヒソヒソ声で、みやげ持って帰るからねと言えと伝える。
満男　「モチモチ」
寅　「よお、満男か、元気かい」
満男　「アノネ、オミヤゲモッテカエルカラネ、ジャア、バイバイ、おならブーだ」

満男ガシャリと受話器を置く。

一同ニコニコしている。

その頃、とらやでは、まだ受話器を片手にしたまま、寅が涙をうかべている。

寅　「おならブーか……生意気な口ききやがって……」

大きく鼻をすすりあげる。

中　略

「とらや」・店内（次の日の夜）

寅、見舞いに来た社長を相手に、持参の酒を飲んでいる。

寅のイライラした様子を、社長は扱いかねた表情で眺めている。

電話が鳴る。

寅、横っ飛びにすっとんで受話器をとる。

寅　「もしもし……親父はいない、おかみもいない、……いつ帰る？　そんなこと知るかい」

ガシャンと受話器を置く。

社長　「おい、そうイライラするなよ。向こうは旅先なんだからさ、飯食ったり風呂入ってたりで忘れることぐらいあるよ」

寅　「お前は他人だからそういう冷てえ口がきけるんだ。肉親の俺の身になってみろ。何かあったんじゃねえか、怪我でもしたんじゃねえか、自動車事故ってことだってある、阿蘇の温泉場はな、深い谷間にあるんだ。だから道だってこんな急な崖を……ああ、タクシーがそこから落っこったりして、そんならみんな死んじゃう

じゃねえか。どうする！」

社長　「決まったわけじゃないじゃないか」

寅　「てめえ何を根拠にそういうことを」

とくってかかるところへ、電話が鳴る。

寅、急いで受話器を取りあげる。

寅　「もしもし……はい、そうです……（やにわに怒鳴る）やい、さくら何でもっと早く電話しねえんだ！　こっちは心配で心配でいてもたってもいられなくなって、自動車事故でひょっとしたらみんな死んじゃって、その葬式の心配までしてたんだぞ、馬鹿野郎！」

温泉旅館の一室

さくらが受話器を片手にして、呆れかえっている。

そこからガンガン流れる寅の声が他の連中にも聞こえている。

寅　「てめえ達にゃな、待つ身というものがどんなにつらいもんか分からねえんだ。オイ、黙ってねえで返事しろ。おい、聞こえてんのか！」

竜造、たまりかねて、その受話器をとる。

竜造　「聞こえてるよ、みんな無事だから安心しろ」

「とらや」・店内

寅　「安心しろ？　よくもぬけぬけとそういうことが言えるな。俺に安心させたきゃ何でもっと早く電話しねえ

二一

んだ！」

竜造　「分かった分かった、こっちが悪かったよ。あやまるあやまる。そいじゃなこれで切るぞ」

寅　「ちょっと待て、まだ何も話してねえじゃねえか」

竜造　「無事だってことが分かればいいだろう、こっちは九州なんだからな、電話代が高くつくんだよ。昨夜は二千八百円もとられたぞ」

寅　「そうか、おいちゃんはそういうケチなことを言うのか、しみったれた叔父貴を持って、俺ァ幸せよ」

竜造　「何だと、この野郎！」

寅　「てめえのしみったれは昔から有名だからな、とらやのダンゴはしみったれダンゴってよ」

竜造　「やい、言っていいことと悪いことがあるんだぞ」

寅　「怒ったか、しみったれ親父」

竜造　「畜生め、てめえが傍にいりゃあブン殴ってやる」

寅　「おう、こりゃ面白いや、殴ってみろ殴ってみろ」

竜造　「て、てめえなんか出て行きやがれ！」

寅　「なんだと、言いやがったな、この野郎、それを言っちゃおしまいだぞ」

竜造　「おしまいよ」

寅　「よおし、じゃ出て行ってやらあ、畜生め後で後悔するな！」

ガチャンと受話器を置き、あっけにとられる社長を尻目に土間に降りる。

寅　「おう、とめるな、さくら、とめるな」

そこまで言って、ふと、社長の他誰もいないのに気づき、憮然とした表情で二階に上がって行く。

社長、見送って、痛ましげにつぶやく。

社長　「哀れで見ちゃあおれねえや……」

（ちくま文庫『男はつらいよ3』）

シュッツの表現を借りれば、この場面での寅次郎とさくら達は互いに「直接的世界」に居るのではなくて、「同時世界」に居る事になる。つまり互いに相手の姿が見えないし、互いに現われている世界も同一の世界ではない。シュッツの言う「社会的直接的世界」に互いに居る場合には、互いに相手の姿が見えるが故に、相手が今何をしているのかが分かるが、「同時世界」に居る場合には互いの姿が見えないが故に、先の引用で出て来た様に、寅次郎がとらやの人々の事を心配する様な事態が生ずる。

シュッツの言う「社会的直接的世界」に互いが居る場合には、私の表現では、先に述べた様に、互いに意味を共有しているから、何らかの意味へと行為している相手の行為が分かるが、相手がこの場面の様に「社会的直接的世界」の中に居ないで、相手の意味への行為が見えないために、寅次郎の様に心配する場合も生じて来る事も有る。

シュッツはそうした場合に、ウェーバーの言う理念型でもって説明するが、私の今までの記述を使うと、やはり意味の共有と言う事で説明することが出来るであろう。この「男はつらいよ」から引用した場面で、寅次郎がとらやの人々の事を色々と心配するのも、寅次郎が、彼には見えないとらやの人々の行為の形態が予測出来るからである。つまり、さくら達は旅先でバスに乗ったり、船に乗ったりするだろう事を寅次郎は予測する訳で、そうした行為形態の予測から寅次郎の心配も生ずるのである。

意味は既に述べた様に、社会を構成する社会の構成契機であり、それは知覚し得る世界を越えて、無限と言って良いほどに広がっているのであり、そのことを我々は経験的に知っている。そしてそうした意味に基づいて、あるいは

意味へと行為する人間の行為の仕方も、意味の広がりと同様に広がって行くのである。

寅次郎が九州を旅しているさくら達とらやの人々の事を心配するのも、寅次郎には見えない場所でも寅次郎が関わっている諸々の意味と同様の意味、あるいは類似した意味へと関わっているであろうと言う予測に基づくのである。つまりそのことを寅次郎が自覚していようと無自覚であろうと、彼と、彼と空間を共有していないさくら達とらやの人々とは、同一のあるいは類似した意味に基づいて、類似した意味へと関わる事によって諸々の行為をしている、と言う事を理解しているのであり、それ故に寅次郎は知覚出来ない所に居るさくら達の事を色々と心配するのである。

意味が社会の中で無限な広がりを見せていると言う事は、そうした様々な意味に基づき、また意味を維持する行為連関も無限に広がっていると言う事を意味する。一人の人間による行為連関は限りが有り、関わる人間も限りが有るが、そうした人間相互の行為連関は無限に続き、そうした行為連関が意味に基づき、また意味をそれとして維持しているのである。さくら達とらやの人々は東京から大分空港まで飛行機で来た訳だが、つまり飛行機と言う有意味的な物へと行為すること（つまり飛行機に乗る事）によって大分まで来た訳だが、彼等が飛行機に乗るためにはそれ以前に様々な人との行為連関が有ったはずである。例えば、飛行機に乗るためには航空券が必要であり、何処かの旅行会社でそれを購入したはずである。つまりそこに何処かの旅行会社の人とさくらとの間に航空券を購入するための行為連関が生じた。映画では描かれていないが、多分さくら（あるいは博）が旅行会社に行って、これこれの人数で何日の何時の便で別府に行きたい旨を旅行会社の人に告げて、その言葉に基づいて旅行会社の人がさくらの希望に即した航空券を手配して、さくらがその料金を旅行会社の人に支払い、それと引き替えに旅行会社の人はさくらに航空券を渡すと言う行為連関が生じた。そしてさくらの手に航空券が渡る前に旅行会社と航空会社との間にも諸々の行為連関が生じて、そうした行為連関の結果、さくらの手に航空券が渡って、とらやの人々は大分行きの飛行機に乗る事が出来たのである。

さらに言えば、さくらが赴いた旅行会社とさくら達が乗った飛行機の会社との間には恒常的な行為連関が有り（つまり何らかの取引が有り）、その恒常的な行為連関の中にさくら達の要求が一時的な取引として組み込まれたのである。つまりさくら達がこれこれの飛行機に乗りたいと言う要求は、さくらが赴いた旅行会社とさくら達が乗った航空会社との間の恒常的な行為連関に乗っかって実現されたのである。つまり或る組織と或る組織との間の恒常的な行為連関に基づいて、一時的な行為連関が可能になるのである。さくら達が別府に行くと言う行為は、観光のためであるから一時的な行為であり、それが可能になるためにはさくらが利用した会社と会社との間の恒常的な行為連関がそれ以前になければならない。

またさくら達が飛行機に乗るためには、それ以前に空港の職員との間に搭乗手続きをしなければならないし、それに基づいてやはり空港の職員によって飛行機まで案内してもらうと言う行為連関が必要である。そしてそうした諸々の行為連関は社会が要求しているのであり、またその要求を充たした場合に、さくら達の欲求、つまり別府に旅行したいと言う欲求を満足されるのも社会である。つまり社会は諸々の意味を配置し、それに基づいて諸々の行為連関の網を張り巡らせることによって、人々の様々な欲求に対して、その欲求を充たすための諸々の行為を要求するのである。例えば、先に述べた様に、さくら達が別府に旅行するために航空券を購入することを要求し、またその代金を旅行会社に支払う事を要求する。そしてそうした要求を充たすために、社会は様々な行為連関を張り巡らせて、欲求充足装置を構築しているのである。

【3】 交換システムとしての社会の再検討

そうした行為連関は何らかの交換システムに基づいている事が多い。既に述べた様に（「寅さんの社会学」『徳山大学論叢第四十九号』参照）、全ての行為や行為連関が常に交換システムに媒介されている訳ではないが、つまり交換

システムを媒介しない行為も存在し得るが、社会の形態をそれが現在有る様に存続せしめているのは、何らかの交換システムである。既に述べた様に（「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」『徳山大学経済学会紀要第二十号』参照）、とらやも一種の交換システムである。そして諸々の意味は交換システムに基づいて或る特定の場に集合せしめられる。だから様々な意味が集まって交換システムが形成されるのではなくて、何らかの交換システムが自らを社会の中で構築するために、それが機能するのに必要な意味を特定の場所に集めるのである。それ故に、社会と言う事を考える場合に、交換システムが一番根源的なものとして存在し、それが何らかの社会的機能を果たして行くために様々な意味を一定の場所へと集めるのである。そして行為連関は常に何らかの交換システムを介して為される。行為連関は交換システムを機能されるためのそれと、交換システムを利用するためのそれに便宜的に分けられるが、人間が何らかの行為を為す場合には常に何らかの交換システムを介する必要が有ると言う事は既に述べた（「寅さんの社会学」『徳山大学論叢第四十九号』参照）。すなわち自分が属している交換システムでは、その行為は交換システムに還元され、自分がその交換システムに属しておらず、その交換システムを利用する場合には、その行為は交換システムに還元されずに、その交換システムを利用することによって達成される何かへと還元される。先の例をもう一度取り上げれば、さくら達は飛行機と言う有意味的な物へと行為した（つまり飛行機に乗った）のであるが、その行為は別府へ行くと言う目的のためであり、航空会社と言う交換システムに何らかの利益を与える（結果的にはそうなるが）ためではない。

しかし映画の中には登場しないが、飛行機を操縦するパイロットやスチュワーデス等は、航空会社と言う交換システムに帰属しているが故に、彼等の行為はその交換システムへと還元される。つまり航空会社と言う交換システムは、それへと何らかの形で関わる人々の役割を分節するのであり、すなわちその航空会社の従業員と客と言う様に分節するのであり、そのことによってその交換システムは機能するのである。つまり交換システムは、それへと関わる

人々の役割を分節することによって、彼等の行為を規定して、何らかの行為連関を形成する。すなわち飛行機のパイロットはその役割として、飛行機を操縦して、交換システムによって分節された客と言う役割を演ずる者達を目的地へと運ぶと言う行為を為し、スチュワーデスはその飛行機に乗った客に諸々のサービスをすると言う行為を為す。また客はその飛行機に乗っている間は、自らの行為をスチュワーデスの指示に従わせなければならない。つまり交換システムはそれに何らかの形で関わる人々の行為を規定するのである。スチュワーデスが乗客に諸々のサービスをすると言う行為を為すのは、彼女が帰属している航空会社と言う交換システムによって規定されているが故である。同様にパイロットが飛行機を操縦して、目的地へと客を運ぶと言う行為を為すのも交換システムによってその様に行為する事を規定されているからである。

諸々の行為連関は交換システムを介して為されると共に、それらは交換システムによって生み出されるのでもある。飛行機の中でのパイロットと副パイロットとの間の行為連関やパイロットとスチュワーデスとの間の行為連関等は航空会社と言う交換システムが生み出した行為連関であり、またそうした交換システムによって規定されている行為連関である。

ここで交換システムについてさらに考察するために、第四十一作目の「寅次郎心の旅路」を例として挙げよう。マドンナは竹下景子で、舞台が海外（ウィーン）になった最初で最後の作品であるが、ここで引用するのは最初の場面で、まだ舞台は日本でマドンナの竹下景子も出て来ない。

都内の大企業の中の会議室で会議が行なわれている。女子社員が一人一人にコーヒーを運ぶ。坂口と言う社員（柄本明）の所にコーヒーが運ばれると、彼はコーヒーを砂糖壷の中に入れて、スプーンでそれをかき回し始める。他の社員が彼のその奇妙な行為に注目する。彼も自分のやっている事が普通ではない事に気づく。

彼の上司が、
「坂口君、休んで良いよ。疲れてんだろ」
と言うと、坂口は、
「疲れてません」
と返事をする。
「ああ、いいんだ、いいんだ。ちょっと休憩しましょうか、僕達も」
と上司は立ち上がり、他の社員も椅子から立上がる。
何処かの田舎のローカル線の脇で一人の男が座って、何か考え事をしている。
電車の中。車掌が車内を歩いている。
「乗車券、お持ちでない方、いらっしゃいませんか」
すると席に座っている一人の男が「はい」と手を上げる。寅次郎である。
「はい、どちらまでいらっしゃいますか」
と車掌が近付く。
「さあて、どっちの方へ行ったら良いかな」
と寅次郎が言うと、車掌が、
「ええ？」
と聞き返す。
「疲れがスーット抜ける様な温泉でさ、女将さんが優しくって、酒が美味くって、どっかこの辺にそんな気のきいた温泉ねえかい？」

「そういう所があったら休みとって私もいきてえなあ。ストレスが多いから、この仕事も」
と二人が会話をしている時、電車が急ブレーキをかけたので、車掌はその反動で倒れる。車掌が窓から外を見ると、電車の前の線路の上に人間の足が見える。車掌は自殺だと思って目をつぶる。そして外に出て、恐る恐るその人間の足が見えた電車の前の所に行く。すると、そこに一人の男が横になっていて、辛うじて電車の車輪に切り刻まれずにすんでいた。危機一髪だった。
「ちょっと、あんた」
と車掌は線路で横になっている男を揺り起こした。
その男は坂口だった。坂口は起き上がり、
「何だ、生きてたか」
と呟く。
「冗談でないぞ、お前。停まったから良い様なものの、首と胴体がバラバラになってたら、どうなったと思ってるんだ。せっかく無事故月間が終わろうとしてるところでないの。人の迷惑考えんの、あんた」
と車掌は座り込んで頭を抱える。
そこへ寅次郎が降りて来て、車掌に、
「文句は後にしな、な、車掌さん」
と言って、坂口の方を向いて、
「おい、死にぱぐっちゃったなあ、ええ。またそのうちやりゃあいいや」
と言って、坂口の手を取って、起こす。
坂口は寅次郎に片手を預けて、もう一方の手で車掌の少なくなっている髪の毛を掴む。車掌が「あいてててて」と

三〇

悲鳴を上げると、寅次郎は「痛くない、痛くない」と言いながら、坂口を起こして、電車の中へ連れて行く。
電車の中で寅次郎は坂口を自分の横に座らせている。車掌が来て、
「お客さん、誠に恐れ入りますが目撃者と言う事で、警察まで一緒に来ていただけますか」
と頼む。
「俺がか？　ああ、良いよ。俺はどうせ暇だから」
と言うと車掌は恐縮して向こうへ行く。
寅次郎は前に座っている女子高校生に、
「なあ、ねえちゃん、暇って顔してるだろう、俺」
と言うと、三人の女子高校生は笑う。
警察署で車掌と寅次郎は坂口を待って、座っている。
寅次郎が車掌に、
「おい、車掌さんよ、お前、今夜暇？」
と訊くと、車掌は、
「へい、まあ暇と言えば暇ですけど」
と言う。
「よし、じゃあ俺に付き合えよ。あの男を、まさかこのまま放り出す訳にはいかねえだろう、おめえ」
と寅次郎が言った所へ、坂口が出て来る。
「よう、すんだか？」
と寅次郎が声をかけると、坂口は、

「はい」
と小声で答える。
「よし、じゃあ今夜は俺が面倒見てやる。な、俺についてこい」
と寅次郎は言って、先に出る。
旅館の一室で、坂口はぼんやりと外を見ている。
そこへ湯上がりの寅次郎が部屋へ入って来る。
「えーえ、良い湯だった。お前も風呂に入って来たら良いんだ。宿は汚いけどさあ、湯は同じだから、な」
と言って座る。
坂口は土下座して、
「行きずりの人間でしかない私なのに、こんなにしていただいて、何とお礼を申し上げて良いやら」
と言って、頭を下げる。
「よっぽど、あれかい、何か辛い事でもあったのか。会社の上役にいびられるとか、家庭のゴタゴタだとか」
「僕、病気なんです」
「う、うつるの？」
と寅次郎は狼狽する。
「いいえ、時々死にたくなりまして」
「へーえ、そら気の毒だなあ。ああ、ここの温泉はなあ、頭によーく利くんだってよう。どうだい、暫らくゆっくりここで湯治してみたら、な」
「有り難いんですが、無断で会社を休んで来ておりましてねえ。明日は出勤いたしませんと。今からですと、新幹

三一

線で上野行きに間に合いますので、これで失礼します」
と坂口は頭を下げて、立ち上がろうとする。
すると寅次郎が、
「おい、お前がいないと会社、潰れちゃうのか？」
と訊くと、
「そんなことありませんけど」
と坂口が言う。
「だったら良いじゃあねえか。いいか、俺はなあ、この忙しい身体にやり繰りをつけて、今晩お前に付き合ってやろうって言ってんだよ。それが迷惑なのか？」
「いいえ、とんでもありません」
「だったら俺の言う事を聞いて、会社なんか行くな。な」
「はい」
「よし、じゃあ風呂へ入って来い。で、桶にね、お湯をこう汲んで、何遍でも何遍でもこうかける。分かったな」
「はい」
「じゃあ行ってこい」
「じゃあ行って来ます」
と坂口は部屋を出る。
「よし、死ぬまでだらだらだら働く事は無いんだよ」
と一人になった寅次郎は独り言を言う。

三二

そこへ宿の女将が入って来て、
「寅さん、晩ご飯、七時で良い？」
と寅次郎に訊く。
「そうだなあ、今晩、ちょっと盛り上がりたいんだけどねえ」
「じゃあ、みどりちゃん呼ぶ？　さっき寅さんが来てるって言ったら、『うわー、逢いたい』って言ってたわ」
「そうかい、それと、ほら、あれなんて言ったっけ、芸者上がりの」
「さきちゃんね、子供が入院してるって言ってたけど」
「まあ、何でも良いや、陽気なの呼んでくれや。パッとやろう、パッと」
「はいはい」
と女将は部屋を出て行く。
その夜、部屋では芸者を呼んで大騒ぎ。車掌がマイクを持ってカラオケをやっている。
寅次郎と芸者達が坂口に酒をついで、それを坂口は一気のみをする。そして芸者とダンスを踊る。
次の日、宿の帳場に坂口が来て、
「お早ようございます。昨夜はお世話様でした」
と女将に礼を言い、
「お勘定をお願いしたいんですが」
と言う。
「あれぇ、寅さん、払うんじゃないの？」
「ああ、僕が払います。勿論昨夜の宴会の分まで。ええと、このカードでよろしいでしょうか？」

と坂口は財布からカードを取り出す。
「ああ、カードね、はい」
と女将は坂口からカードを受け取る。
寅次郎は一人部屋の布団の上で手を合わせて、柏手を打ち、
「お早ようございます」
と言う。
そこへ坂口が入って来て、新聞を寅次郎に渡す。
「ああ、有難う、有難う」
と新聞を受け取る。
そして「どうだい、気分は？」と坂口に訊く。
「ええ、お陰さまで。あんなにぐっすり眠れたのは何年ぶりでしょうか」
「ああ、そりゃあ良かったなあ。温泉が効いたんだよ」
「いいえ、あなたのお陰です。つまり僕はあなたの傍に居るだけでリラックス出来るんです」
「リラックスって、何、そのリラックスって？」
「堅くちぢこまった心が柔らかく溶けて行くとでも言うか」
「はー、溶けちゃうのか」
「今、お茶入れます」
「ああ、いいよいいよ、そういうことはここのねえちゃんがやってくれるからよ」
坂口はお茶を入れながら、

三四

「こんなことを、お聞きして良いのかどうか」
と言う。
「ああ、良いよ。何でもお聞きしな。なんだい」
「一体あなたはどういう方なんでしょうか？」
「はっ、どういう方って。まあ一言で言って、旅人。稼業で言うと、渡世人ってところかな」
「いいなあ」
「ははは、良い事ばっかりありゃあしねえよ。でも、これゃあしょうがねえよな。てめえが好きで入った道なんだから」
「じゃあ、あなたにとって何でしょうか、生きがいってのは？」
「そうさなあ」
と寅次郎は立ち上がる。
「旅先でふるいつきてえような良い女に巡り合える事さ、へへへ」
と言って、ちらっと坂口の方を見て、
「あーあ、うんこしてこよう」
と部屋を出て行く。
「お供します」
と坂口も立ち上がって、寅次郎の後をおっかける。
「お供って何処へよう」
「寅さんの行く所でしたら、もう何処でも」

三五

「かみさんが心配するんじゃねえのか」
「女房は八年前に別れました。昨夜話した様に」
「そりゃあ聞いた、聞いた」
と寅次郎はトイレへ入ろうとするが、坂口は寅次郎の羽織の袖を握って離さない。
「会社はどうするんだ」
「会社は私がいなくたって潰れませんから」
と寅次郎と一緒にトイレへ入る。
「社長に叱られるぞ」
「社長の顔、見た事ありません」
寅次郎は坂口がトイレに入って来たので、坂口を押し出して、
「関東のつれしょんべんてのは聞いたけどねえ、つれうんこなんてのは嫌だよ」
と言って、トイレのドアを閉める。
「これからどちらへいらっしゃるんでしょうか？」
「まだ決めてない、決めてない」
坂口はトイレのドアの外で、
「いつ決めるんでしょうか？」
と訊く。
「まあ、そうさなあ。これから宿を出て、それから吹く風に聞いてみるさ」
とドアの向こうで寅次郎の声が聞こえる。

三六

「風に聞くか、いいなあ」
と坂口は窓の外を見る。
二人は宿を出て、道を歩いている。
「よう、これ、少し足りねえけどなあ、俺の分だから、取っといてくれよ」
と寅次郎は坂口に何枚かのお札を渡そうとする。
「いいんですよ。僕、一人もんだからこずかいにはふじゆうしておりませんから」
「お前、強情だなあ、おい」
と寅次郎は仕方なく札を財布の中に入れる。
「お前、これから何処へ行くんだい？」
「寅さんの行く所でしたら何処でも良いです」
「そうは言ってもよう、いきてえ所が有るんだろう。何処だ？」
「有る事は有るんですが、少し遠いんです」
「いいよ、かまわねえ言ってみな、何処へいきてえんだ？」
「ウィーンです」
「ああ、由布院か、遠いなあ」
「いいえ、ウィーンなんですよ」
「由布院だろ？　九州のな。知ってるよ、遠いよ」
「いいえ、九州じゃなくて、ウィーンなんです」
そこへ宣伝カーが通り掛かったので、寅次郎はそれを止める。

「ちょっと、その辺まで乗っけてってくれや」
と運転手に言って、坂口に手招きして乗る様に合図する。
「どうだい、景気は」
と言いながら、寅次郎は助手席に乗り込む。
場面は変わって、帝釈天の境内。源吉が掃除をしている。
そこへ一人の男が来て、源吉に話し掛ける。
「これが帝釈天？　あ、そうかい、へーえ」
と言って、寺の外へ出る。
とらやではさくらが店を手伝っている。そこへさっきの男が来る。
「こちら車寅次郎さんのお宅でしょうか？」
「はい」ととらやの小僧が返事をすると、男は店の中へ入って行く。
そしてさくらに、
「どうも、極東ツーリストからまいりました。このたびはご利用いただきまして大変有難うございました」
と丁寧にお辞儀をする。さくらは訳が分からないままに頭を下げる。
「ちょっと失礼します」
と男は椅子に座って、
「えーと、さっそくなんですけれども」
と言いながら、鞄から書類を取り出して、
「これがですねえ、車寅次郎さんの航空券になっておりますね、これが、はい。それからこれが保険関係でござい

三八

まして。後、スケジュール表その他諸々が有るんですけれども。奥さん、あのー、車さんのパスポートをちょっと確認したいんで、拝見できますか？」

「パスポート？」

「ええ、旅券番号が必要なんですが」

「誰の？」

「ですから、車寅次郎さんの」

さくらが変な顔をしているので、

「お持ちのはずですよ。本人からうかがっておりますから。なんでもおとどしの夏に、お友達と二人で競輪で、万車券をお取りになって、ハワイに行こうと言う事になって、その時に取得されたそうなんですけどね」

「ハワイに？」

「ええ、もっともその旅行はお出かけになる前に、倍にしようと全部注ぎ込んだら、スッテンテンにやられちまって、取り止めになったそうなんですけどね」

「おばちゃん、そんな事あったっけ」

とさくらは奥に居るおばちゃんに訊く。

「そういえば、預かってたよ。そのパスなんとか言うの」

とおばちゃんは横に有る引き出しを開けて探し始める。

旅行会社の男はまたさくらに、

「ええと、出発は明晩の二十一時三十分になっておりますから、一時間半前には成田空港の北ウイングのＫＬＡのチェックインカウンターにお越し下さるように。そうですねえ、万一の場合の保険の受け取り人がですねえ、諏訪さ

三九

くらさんになっておりますけれども、どういう方なんでしょう？」
「あのー、私です」
「ああ、そうですか。それじゃあこれ一式お受け取り下さい」
と書類をさくらに渡す。
「えー、さてと、何か他にご質問は？」
「あのー、これ、何処へ行く切符ですか？」
「ウィーンです」
「ウィーン？」
「良いですよ、今頃の季節は」
そこへおばちゃんが寅次郎のパスポートを持って来る。
「あっ、結構です」
と男はパスポートを受け取って、中を開く。そして寅次郎の写真を見て笑う。
「笑ってる写真てのは珍しいなあ。よく通ったなあ、これで」
さくらが横から、
「すみません、このお金、どのように？」
と不安そうに訊ねる。
「無論既にいただいておりますよ」
「兄からですか？」
「いえいえ、坂口さんとおっしゃいまして、以前から内のお得意さまなんですけれども、このたびはお二人でウィ

ーンにいらっしゃるとか。しかし変わった方ですよねえ、綺麗なご夫人がお供ならともかく、こんな変な男を連れてヨーロッパに行くなんてねえ」

とパスポートに貼ってある寅次郎の写真を指差して言う。

そしてさくら達が寅次郎の身内であることに気づいて、

「失礼いたしました」

と謝る。

そしてパスポートを返して、

「では、わたくしはこれで。寅さんによろしくお伝え下さい。では楽しい御旅行を」

と言って、立ち去る。

そして寅次郎と坂口はウィーンへ行って、そこで添乗員をしているマドンナの竹下景子に出会う。

この「寅次郎心の旅路」の最初の場面では、何らかの交換システムに属している人間が少なくとも四人登場している。まず自殺未遂をして寅次郎に色々と面倒を見てもらい、結局寅次郎と一緒にウィーンへ行く事になるエリートサラリーマンの坂口兵馬。それに坂口が自殺未遂をする電車の車掌、それに旅行会社の男、さらに旅館の女将。

まず電車の車掌であるが、彼はＪＲと言う交換システム（この映画が上映されたのが一九八九年で、国鉄が民営化されたのが一九八七年だから、この車掌が属している交換システムはＪＲであると言う事になる。ただし、この場所が何処か明確ではないが、坂口の台詞から恐らく東北の何処かだろう。だからこの車掌が属している交換システムはＪＲ東北と言う事になる。）に属している。既に述べた様に交換システムは、そのシステムの目的に応じて諸々の意味を集合せしめて、それらを構造的に配置する。この場面で登場する有意味的な物は、まず電車であり、この場面に

出て来るのは一両だけの編成の電車だが、おそらく国鉄時代には赤字路線だったのだろう。それから電車が走る線路、車掌の制服、切符、客が座る座席、そしてこの場面には登場してないが、駅の建物やそこに設置してある諸々の設備等々。それらがＪＲと言う交換システムが機能するために必要な空間に配置した諸々の有意味的な物であり、ＪＲの職員とか、ＪＲを利用する客はそうした諸々の有意味的な物へと様々な形で行為することによって、ＪＲを利用するのである。そしてそうした様々な意味はアットランダムに配置されているのではなくて、この交換システムを利用する人々の便益をはかって特定の空間に配置されている。例えば、駅もあまり不便な場所に配置すれば、利用客にとって不便になり、その結果利潤があまり上がらないと言う事になる。

そしてこの場面に登場する車掌の様にＪＲと言う交換システムに属している人間は、彼が属しているシステムによって与えられた役割を演ずる事によって、彼が属している交換システムからその代償として給料を与えられる。つまり彼はＪＲと言う交換システムによって与えられた役割を演ずる事によって、ＪＲと言う交換システムが諸々の空間へと配置した諸々の意味へと行為する。あるいは交換システムによって与えられた役割を演ずる事が、交換システムによって集められた様々な意味へと行為することである。この映画で登場する車掌は、一両だけの車両の通路を歩きながら乗客に「乗車券を持っていない人はいないか」を訊ねる、と言う行為を為す。その行為は、乗客は電車を利用する代償として乗車券を購入しなければならないと言う、あらゆる交換システムが有する法則に基づいた行為であり、つまり交換システムを利用する客は、その交換システムを何らかの形で利用するためにはその代償をその交換システムへと払わなければならないと言う法則に基づいた行為である。

そして車掌と寅次郎との会話は、言わば交換システムによって彼に与えられた役割からの逸脱であると言って良い。つまり車掌に義務付けられた行為の中には客と無駄話をすると言う事は含まれない。しかし別の面からすれば、客との会話も客へのサービスであると言う見方も出来る。

寅次郎の乗った電車はエリートサラリーマンである坂口の自殺未遂に遭遇する訳であるが、その時に車掌は、

「冗談でないぞ、お前。停まったから良い様なものの、首と胴体がバラバラになってたら、どうなったと思ってるんだ。せっかく無事故月間が終わろうとしているところでないの。人の迷惑考えんの、あんた」

と言う台詞を吐く。

考え様によっては自殺未遂者に対して随分冷たい言葉であるが、この車掌の台詞はＪＲと言う交換システムに属して、現在その交換システムによって与えられた役割を演じている者としての台詞である。この車掌が勤務外であったならば、別の台詞を吐くだろう。つまり、彼は勤務中なのであり、つまりＪＲと言う交換システムによって彼に与えられた役割を演じている最中なのであり、その場合に事故が起きると彼の失点になるのだろう。つまり人間は一人の人間として有る事よりも、交換システムに属して、それによって規定された人間として有る自分の方を優先する場合が多い。すなわち人間は自分が何らかの交換システムに帰属していて、それによって与えられた役割を遂行している最中の場合には、一人の人間として行為するよりも交換システムによって規定された行為を為す場合が多い。彼は寅次郎に頼まれて、その夜、寅次郎と二人で坂口を慰めるために宿で大騒ぎをするが、その事は彼が交換システムによって与えられた役割から離れて行為した事を示している。

つまり寅次郎による坂口を慰めるためのドンチャン騒ぎは如何なる交換システムによって与えられた役割の遂行でもない。寅次郎とエリートサラリーマンの坂口とは行きずりの人間の間柄であり、寅次郎には坂口と言う人間にいかなる義理もないし、また交換システム内での関係も無い。つまり寅次郎は前に述べた様に、自分の役割を創造したのであり、ＪＲの職員である車掌も、自分の役割以外の行為を為したのである。

役割の創造と言う行為は、先にも述べた様に（「寅さんの社会学」『徳山大学論叢第四十九号』参照）、既存の何らかの交換システムによって与えられた役割以外の行為を為す事であり、つまり現在の社会には存在しない役割を演ず

る事である。前に述べた、第三十九作目の「寅次郎物語」では、かつての仕事仲間の子供を連れて、その子供の母親を探す旅に出るのであるが、そのような役割は現代社会の中には存在しない訳であり、それ故にそれは寅次郎が自らそうした行為を為す事によって、そうした役割を自ら創造した事になる。

この「寅次郎心の旅路」でのこの場面での寅次郎の行為もやはりそれと類似している。そして車掌は寅次郎に付き合う事によって、自分が属する交換システムによって与えられている行為以外の行為を為す事になる。

寅次郎のこの行為、それからこの物語の後に展開されるウィーンへと坂口と一緒に行く行為も、何らかの交換システムによって与えられた役割の遂行ではなくて、寅次郎が自ら行為することによって創造した役割の遂行である。しかしその場合も、彼は何らかの交換システムを利用せざるを得ない。この場合では、彼は馴染みの宿と言う交換システムを利用する。寅次郎と宿の女将とは昵懇の仲らしくて、寅次郎は女将に陽気な芸者を何人か呼んで盛り上がりたいと頼む。そしてその夜、彼等は宿でドンチャン騒ぎをする。寅次郎にとって宿でドンチャン騒ぎをする事は、先にも述べた様に役割の創造としての行為であり、彼自身にはいかなる利益も齎らされる事は無い（はずであったが結果的には宿代と宴会代の全てを坂口が支払ったので寅次郎は無料で飲み食いが出来た事になる）。

しかし宿の女将にとっては、寅次郎が自分の旅館で宿泊して、ドンチャン騒ぎをすることは、寅次郎の目的がどのようなものであろうと、それら全ては旅館と言う交換システムに還元される行為であった。交換システムにとっては、そのシステムが本来の機能を果たす様に客がそのシステムの中で行為をしてくれれば良い訳であり、客の目的がどのようなものであるかと言う事は、客がその交換システムをそれとして利用する限りは関係無い。つまり宿の女将にとっては寅次郎は馴染みの客であり、その馴染みの客との間に交換システムを介した行為連関が生じて、その結果彼女が所有している旅館と言う交換システムに利益が有ればそれで良いのである。

次にエリートサラリーマンの坂口についてであるが、彼は大手の企業（どのような職種の企業なのかは分からない）

に属していて、何らかの原因で自殺を計るが失敗して、寅次郎に救われる訳で、物語の中では寅次郎がウィーンへ行く切っ掛けとなる役割を演じている。坂口がどのような原因で自殺を計ろうとしたのかは、映画の中では明らかではないが、大手の企業と言う交換システムに帰属している人間にとっての、自分が属している交換システムからの何らかの重圧感に押しつぶされて自殺を計ったのであろう。似た様な筋で第三十四作目の「寅次郎真実一路」が有る。前にもその一部を引用したが、ここでは「寅次郎心の旅路」での坂口の自殺と類似した部分を引用してみよう。

大手の証券会社の社員である富永健吉（米倉斎加年）におごられた寅次郎は次の日に富永が勤めている証券会社を訪れる。そして富永を呼び出してもらう。

富永が仕事をしている部屋に寅次郎がやって来て、

「九州の！」

と部屋の入り口で声をかける。

富永が入り口の方に目をやると、変な男が手招きしている。

「ええと、何処かでお会いしましたねえ」

と富永は寅次郎を良く憶えていない。

「柴又、柴又」

と寅次郎が言うと、

「あっ、昨夜焼き鳥屋で」

と思い出す。

「何か御用でしょうか？」

と富永が訊ねると、
「いやいや、すっかりゴチになっちゃったんでよう、今日は一杯差し上げようかと思ってやってきたんだけども、相当忙しそうだねえ。何時頃終わるの？」
「お気持ちは嬉しいですが、今日は遅くなりますから」
「いいんだ、いいんだ、いいんだ。こっちは暇だったらいくらだって有るんだからさ、な、気にすんなよ」
すると部屋の奥から、
「課長、電話ですよ」
と言う声が聞こえる。
「ダチ公が呼んでる、ダチ公が」
「あのー、それじゃあとにかく、応接間の方でお待ち下さい」
と富永は寅次郎を応接間へと案内する。
「どうぞ、どうぞ。じゃあここでお待ち下さい」
と寅次郎を応接間へと入れる。
「今、お茶でも入れますから」
と言って、富永が応接間を出ようとすると、
「おい、九州の、これバナナだけどよう、ダチと一緒につまんでくれ」
と新聞紙でくるんだ物を富永に渡す。
富永は遠慮するが、仕方なく受け取る。
そしてそれを持って会議室へと行く。

会議室では長いテーブルを囲んで、社員達が座っており、前に部長らしい口髭を生やした男が座っている。部長は何かの書類を受け取る。

「えーっと、伊藤課長、今日の主な材料を言ってみろ」

とテーブルの横に座っている一人に声をかける。

「はい、大材料が三つ。一つ、ニューヨーク株式の急反発、これで日本も方向が変わります。次、公定歩合の引下。時期はここ一週間以内、三番目、心配されていた半導体の流用ですが、今年も堅調だと言う、これは研究所の発表が有ります」

「底が入ったと見て良いな」

と部長が訊く。

「はい」

と伊藤課長が答える。

「ようし、明日から主力株で買いだ」

と部長が言う。

すると、前に座っている富永が、

「いや、どうかなあ、二、三日見た方が良いと思います」

と言うと、部長が、

「馬鹿野郎、そんな事言ってるから他社に先越されるんだよ。先取りだ、先取り」

と富永を叱責して、別の課長の方を見て、

「加藤」

と呼ぶ。
「加藤ブロックは、思い切って強気で行きます」
と言うと、部長が、
「葛西」
とまた別の課長の名を呼ぶ。
「葛西ブロックは」
と葛西課長が言いかけた時に、寅次郎が会議室のドアを突然開ける。そして、
「九州の」
と富永を探す。
富永はびっくりして立ち上がり、他の人々も寅次郎の方を見る。
「商売中だろ？　後で」
と寅次郎は片手を上げて、ドアを閉めて出て行く。
みんなは富永の方を見る。
富永は立ち上がって、
「失礼」
と言って、会議室を出て行く。
「何だあれ？」
と部長は変な顔をして横の人に訊く。
外では寅次郎が待っている。

四八

「ああ、車さん、すみませんねえ、遅くなって。何でしたら今日は」
と富永が言うと、
「いいんだ、いいんだ。俺の方は気にしなくて、さあ。ここで待ってるから」
「そうですか」
と富永は寅次郎に一礼してまた会議室に入って行く。
会議室ではまだ会議が続いている。
一人の男が報告している。
「商社は最近、何処も手を出しませんから、やれば絶対上ると思うんです」
「自信あるか?」
と部長が訊く。
「あります」
とその男が大声で答える。
「そろそろデパート、スーパー行きませんか」
と別の男が言う。
机の端に置いてあった、寅次郎が持って来たバナナを誰かが取って、紙に包んだバナナの一つを取って、他の人に渡す。
何人かが議論をしている。
部長が大声で怒鳴る。
「馬鹿野郎、お前ら、今頃何言ってんだ! 遅いんだ、そんな物!」

四九

と言いながら、バナナを一つ取る。
「近頃、お前達なあ、材料の後追いばっかりしてるぞ！　手出すんだ、もっと、手！　先取りだ、先取り！」
とバナナを手にしながら、みんなを怒鳴る。
みんなはそれぞれバナナを取る。
寅次郎は応接室で退屈そうに待っている。外はもう暗くなって家路へと急ぐ人々で街路は一杯である。
寅次郎は何時の間にか、応接室のソファーの上で寝ている。
そこへやっと会議を終えた富永が入って来る。そして、
「車さん、車さん」
と寅次郎を起こす。
「お待たせしました」
寅次郎は目を覚まして、起き上がる。
「何だかすっかり寝ちゃったよ。今、商売終わったの？」
「ええ」
寅次郎は時計を見て、
「ええ！　なんだ、もう九時か。課長さんなんてそんなに遅くまで働くの？」
と言う。
「さあ、飲みましょう」
と富永は立ち上がる。
焼き鳥屋で二人はすっかり酔っ払って、大声で話している。

それから二人は電車の中で互いにもたれ掛かって寝ている。
夜中にとらやに電話がかかる。おばちゃんが電話に出る。
「はいはい、とらやです」
と不機嫌な声を出す。
「はい、そうですが」
電話の向こうから女性の声が聞こえて来る。
〈あのー、富永の家内でございます。主人がいつもお世話になっております〉
「は、はい」
〈車さんは今夜は私共にお泊りになります。ご心配なさるといけないと思いましてお電話いたしました〉
「まあ、それはそれは。あのー、恐れ入りますけれども、ちょいと本人、お願いします」
〈車さんはお酔いになってらして〉
「ええ！　まあ、なんてお詫びすれば良いのか」
〈とんでもございません。じゃ、失礼します〉
と電話を切る。
「今度は何をしでかす気なんだろう、あの男」
とおばちゃんは言って、電話の傍を離れる。
次の日の朝、夜が明けた頃、富永は自転車に乗って出勤する。
目を覚ました寅次郎は自分が何処に居るのか分からない。
「何処だ、ここは？」

五一

と呟く。そしてふすまをそっと開けて、部屋の外を見る。しかし憶えがない。
寅次郎は布団から出て、家の中をうろうろする。
そしてリビングルームで富永の妻のふじ子（大原麗子）に出くわす。
「お早ようございます」
とふじ子は寅次郎に挨拶する。
寅次郎は訳が分からずにぼんやりしている。
「良くお休みになれました？」
寅次郎はまだ訳が分からずに、ふじ子を見ている。
「洗面所にタオルと歯ブラシを用意してありますからどうぞ」
とふじ子が言うが、寅次郎はまだ怪訝な顔をしている。そして、
「あのー、大変失礼ですけれども、そちらは何処のどなたでしょうか？」
とふじ子に訊ねる。
「富永の家内のふじ子ですけれども」
とふじ子が言うが、寅次郎はまだ怪訝そうな顔をしている。
「昨夜、主人と一緒に酔っ払ってお見えになったでしょう」
とふじ子が言うと、やっと思い出して、
「ああ、九州……課長さんの奥さん」
「はい」
とふじ子は笑いをこらえる様な顔をして言う。

五二

「これはこれは大変ご無礼をいたしました。わたくし車寅次郎と申します。ご主人には大変お世話になりまして」
と寅次郎が言うと、
「昨夜もそうやって挨拶なさったのよ。何も憶えてらっしゃらないんですか」
「すっかり良い気持ちに酔っ払っちゃったものですから。あーそうか、課長さんの所に泊まっちゃったのか、俺は」
とやっと昨夜の事を思い出す。
「コーヒーになさる。それとも紅茶」
「はい、わたくしいつもコーヒーを」
「はい」
寅次郎は窓から外を眺める。そして、
「ここはどこらあたりなんでしょうかねえ。なんだか随分長い間電車に乗った様な気がしたんですけれども」
「茨城県の牛久沼ですよ」
「牛久沼、はぁー。じゃあ課長さん、ここから毎日東京へ行ってるんですか？」
「ええ」
「疲れるだろうなあ。じゃまだ寝てるんですね」
「七時半に会議だって、朝六時に出掛けたんです」
「朝の六時！」
「毎日なんです」
「はぁー、例えば一時に寝たとしても、一、二、三、四、五、はぁー」
「三年前までは都内の公団住宅にいたんですけどね、主人がどうしても自分の家を欲しがって、それも水や山の有

五三

る所が良いからって、結局こういう所に。何しろ田舎育ちだから」
「でも奥さん、もう少しの辛抱ですよ。今に社長になったら、四谷、赤坂、麹町、ちゃらちゃら流れる御茶ノ水、そのあたりの大きなお屋敷を建てて、送り迎えの車が必ず来る様になりますよ」
「面白い方ね」
「そうでしょうか」
と寅次郎は照れて、椅子の上に座る。
ふじ子が寅次郎の所へ朝刊を持って来て、
「どうぞ、新聞を」
と寅次郎に新聞を渡す。
「ここは良い所ですねえ、静かで」
「ええ、子供にとってはね」
「お子さんは、まだ寝ているんですか？」
「いいえ、とっくに学校へ行きました」
「そうですか」
と寅次郎は新聞に目を向けたが、ふと気がついて、
「と言う事は、あの、奥さんと俺と二人っきりって事ですか」
と訊く。
「そうよ」
とふじ子が答えると、寅次郎は途端に立ち上がって、

「どうも奥さん、お邪魔しまして。これで失礼しますんで、あのー、課長さんによろしくお伝え下さいまし」
と帰ろうとする。
「でも今朝ご飯の支度を」
「いや、結構です。どうもお邪魔しました」
と寅次郎は出て行く。
寅次郎が川に沿って歩いていると、ふじ子が後を追っ掛けて来て、
「あのー、ちょっと。忘れ物」
と手に何か持って走って来る。ふじ子が手に持っているのはお守りだった。
「どうもすみません、わざわざ」
と寅次郎は礼を言って、それを受け取る。
「あのー、遠い所ですけれども、またお暇な時にお出かけ下さい」
「有難うございます、それじゃあ」
と寅次郎が立ち去ろうとすると、
「寅さん」
とふじ子が声をかける。
「すいません、昨夜主人が寅さん、寅さんと呼んでたもんだから、つい」
「まあ、どうぞ寅と呼んでやって下さい」
「じゃあ、寅さん」
「はい」

「奥様にどうかよろしく」
「そういう面倒な物は持ち合わせちゃあおりません」
「後免なさい」
「いいえ、それじゃあ後免なすって」
と言って、寅次郎は背を向ける。

中　略

その日も富永は満員電車に揺られて出勤しようとする。しかし電車を降りて、会社まで歩いて行く途中で、富永は喫茶店に入り、ぼんやりと外の風景を見る。外には出勤する人々が通り過ぎていた。富永は喫茶店で何か考え事をしている。頭の中には株式の数字が浮かぶ。ウェイトレスがコーヒーを持って来た時、彼は突然立ち上がって、喫茶店を出る。

そしてタクシーに乗って何処かへ行く。頭の中には綺麗な花が浮かぶ。それは富永が育った故郷の景色だった。

このようにして、大手の証券会社のエリートサラリーマンの富永は失踪する。そしてその連絡をふじ子から受けた寅次郎はふじ子と一緒に富永を探す旅に出る。

「寅次郎心の旅路」の坂口の場合も、「寅次郎真実一路」の富永の場合も、エリートサラリーマンとして大手の企業と言う交換システムに属していて、そのシステムから来る重圧感に押し潰されて、坂口は自殺しようとし、また富永は失踪する。それでは交換システムがそれに属している人間に与える重圧感とはどのようなものであり、何故交換システムはそれに属する人間にそのようなプレッシャーを与えるのであろうか。

五六

既に述べた様に交換システムが、その交換システムの目的のために必要な様々な意味を集めて、それを様々な空間内に配置せしめる。そしてそうした様々な意味をシステム内に維持するために意味への行為連関が形成される。意味への行為連関は、行為を為す人間が属している交換システムによって大きく規定されて、諸々の行為が交換システムへと齎らす利潤が出来るだけ大きくなる様にする。先の「寅次郎真実一路」の中に登場する会議の場面は、そうした交換システム内の諸々の行為連関がどのようなものであれば交換システムにより大きな利益を齎らすか、と言う事についての会議であると言って良い。

つまり何らかの交換システムに帰属する人々は、自分が属している交換システムによって、諸々の行為連関を、交換システムに出来るだけ多くの利益を齎らす様に規定される。その事は何らかの交換システムに属する人は、交換システムが生み出す諸々の行為連関の中に組み込まれて、その行為連関の中から出られないと言う事を意味する。交換システムはそれ自身が主体であり、先の「寅次郎真実一路」の中に出て来る、社員達を叱咤していた部長も、富永や坂口と同様に交換システムが生み出す行為連関の中に組み込まれて、他の社員と共に形成する行為連関によって規定されているのである。誰かが交換システムを動かしているのではなくて、交換システムは自らが意味を集合せしめ、諸々の行為連関を形成して、その中に組み込まれている人間達を動かしているのである。交換システムが一度作動すると、もはや誰もその動きを止める事は出来ず、それは永遠にその中に帰属する人間達を動かすのである。

交換システムが自らの中に形成する行為連関は、交換システムの規模が大きい程大規模になり、一人一人の人間の行為を規定する力も大きくなって行く。交換システムの中で交換システムが形成する行為連関は、その交換システムに帰属する人々をその中に組み込み、蜘が作る網の様に一人一人を絡み取る。何らかの交換システムに属する人々は、交換システムが自らの中に形成する諸々の行為連関の一契機となって、同じ交換システムに属する他の人々と共に交換システムが形成し、交換システムへと還元される行為を為し続ける。彼等の行為は交換システムに由来し、交

五七

換システムへと帰還する一連の行為の連なりの中で彼等が退職するまで延々と続けられる。彼等の行為の一つ一つは円環を描く様に、交換システムから交換システムへと帰って行く。その行為連関の円環は彼等の存在に重くのしかかり、彼等を圧迫する。生きていると言う事は、大部分の人々にとって、このような何らかの交換システムに帰属して、絶えずシステムへと還元して行く行為を為し続けて行くのである。誰もそうした自分の生き方に対して疑問を抱く時が、ほんの一瞬であっても有るはずである。しかし大方の人間はその事をそれ以上に深く考えないで、仕方の無い事として諦めるか、あるいはシステムへと帰属することに生きがいを求める。それに対して「寅次郎心の旅路」の坂口や「寅次郎真実一路」の富永は、そうした生き方に疑問を抱いて、坂口は自殺しようとするし、富永は出勤途中で突然失踪する。

しかし、坂口の場合と富永の場合とでは微妙な違いが有る。坂口の場合は、彼が属しているシステムからの圧迫、重圧に押し潰されそうになって、自殺しようとする。つまり坂口は彼の存在にのしかかる行為連関そのものの重さに耐えかねていたのであり、それに対して、富永の場合には、自分が属している交換システムのために生きる事への疑問が或る日突然頭をもたげて来たのである。二人共、自分が属している交換システムがその中に形成する行為連関の犠牲になったのであるが、その犠牲の成り方が、坂口の場合はどちらかと言うと即物的であり、実感として自分にのしかかるシステムの、あるいは行為連関の重圧を感じたのである。それに対して富永の場合は、ふと或る日そうした自分の生き方に対する疑問が頭をもたげて来て、言わば彼の頭の中に突然浮かんだ哲学的な疑念に駆り立てられて失踪するのである。

そうした交換システムの重圧に耐えかねるエリートサラリーマンと比べて、寅次郎は如何なる交換システムにも属さずに気ままに生きており、前にも書いた様に、（「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」『徳山大学論叢第四十八号』参照）大部分の何らかの交換システムの中で生きている人達にとって、そうした寅次郎の気楽な生き方が一種の憧れ

の様に見えて来るのである。

そしてこの「寅次郎心の旅路」の先に引用した部分に出て来る、交換システムに属する者の四人目の人物は、極東ツーリストと言う旅行会社の男である。他の三人と比べてこの男が属する旅行会社は画面には登場しない。つまり彼が属する交換システムが集合せしめたであろう意味の集合態が姿を見せないで、ただ旅行会社に勤務していると言う男だけが登場するのである。そして自分が属している交換システムによって規定された行為をとらやで遂行することによって、さくらやおばちゃんとの間に行為連関を形成して、彼が、彼の属する交換システムによって規定された行為を成し遂げる。

彼が属している旅行会社と言う交換システムは映画の中には姿を現わさないが、彼がとらやで行なう行為、つまりさくら達との間で形成する行為連関から、彼のとらやでの行為は、彼の背後に有るであろう旅行会社と言う交換システム（その旅行会社の固有名詞は、その男の言葉から「極東ツーリスト」と言う名前の会社だと分かる）によって規定された行為であると言う事が分かる。彼のその行為とさくら達の彼への行為が連関して、彼は旅行会社と言う交換システムによって与えられた行為を為す事が出来る。つまり、この場面の特徴は、交換システムは、それを構成している意味の集合態が姿を現わさなくても、一人の人間の登場によって開示されると言う事である。すなわち、彼のとらやでのさくら達と為す行為連関は、それ以前に既に為されている何らかの行為連関に基づいて初めて可能なのである。つまり「極東ツーリスト」と言う名を持つ交換システムが生み出す諸々の行為連関、例えばまず坂口がその旅行会社に二人分のウィーン行きの航空券を申し込み、旅行会社が代理している航空会社との間に生ずる何らかの行為連関等々によって、彼のとらやでの諸々の行為が可能になったのであり、すなわち彼のとらやでのそうした行為連関は、それ以前に彼の行為を可能にした、彼が属している交換システムの存在を示唆しているのであり、あるいは彼のとらやでの諸々の行為を通して、「極東ツーリスト」と言う交換システムが姿を現わすのである。

五九

以上で「寅次郎心の旅路」からの引用についての考察を終わり、次に交換システムについて別な角度から考えてみよう。

富永健一の『社会学原理』の中に次の様な記述が有る。

「市場は交換というゲゼルシャフト行為が複数行為者のあいだで行なわれる場所であるが、売り手と買い手は交換の合意が成立すると瞬時に交換行為を終了して別れ、以後二度と会うことはない――もちろん主婦が顔なじみの八百屋や魚屋から毎日買うということもあるが、売り手と買い手の関係が持続するということは少なくとも市場たることの必要条件には含まれない。交換行為は相互行為の一形態であるが、その相互行為が将来にわたって持続することが両行為者によって期待されていない限り、そこに社会関係が成立しているとはいえない。すなわち、市場は相互行為の場であるが社会関係を欠いている。このことは、市場が本書の冒頭で与えた社会の定義、すなわちわれわれの概念化からすれば市場は社会ではない（われわれはそれを準社会とした）としなければならない。」（富永健一『社会学原理』）

また同じ書物の別の箇所で、富永健一は次の様に述べている。

「相互行為という概念と社会的行為という概念とは区別しておかねばならない。マックス・ヴェーバーによる社会的行為の定義『行為者によって考えられている意味の上からいって他者の行為と関係をもち、その経過においてこれに指向しているような行為』（ヴェーバー『経済と社会』）は、これだけを見ると相互行為と同義のようにも解される。しかし他の箇所でヴェーバーが『社会的行為は過去の・現在の・または未来に期待される他者の行動に指向し得る。「他者」とは単独の知人でもあり得るし、不特定多数者でもあり得るし、まったく未来の人でもあり得る』（ヴェーバー『同書』）と述べているのを合わせ考えれば、彼が社会的行為という語によって意味しているのは相互行為よりずっと広くて、他者との関係が直接的すなわちパーソナルでない場合をも含むということがわかる。不特定多数者とか未知の人とのあいだで成り立つ社会的行為の例として、ヴェーバーは貨幣的交換をあげている。未知の人が作った製品

を買ってこれを消費する時、そこに間接的な社会的行為がある。そこで、社会的行為とは直接または間接に他者関連的であるような行為である、と定義することができる。相互行為はしたがって社会的行為の特殊ケースである。」（富永健一『同書』）

まず最初に挙げた引用部分で富永は市場は社会ではなくて、準社会であると述べている。彼の社会の（ミクロ的な）定義は、持続的な相互行為である。その定義に依るならば、市場での相互行為は社会的関係ではないと言う事になるが、それでは何故持続的行為のみが社会的関係で、持続的ではない相互行為は社会的関係ではないのであろうか。そのことについて富永は明確に述べていない様に思われる。

私が既に何度も述べた交換システムと市場とは同じではないが、多くの部分が市場と重なる。たしかに市場、あるいは交換システムを介する行為連関は持続的ではない場合が多い。先の「寅次郎心の旅路」に登場する旅行会社の男と、彼と行為連関を形成するさくらとの行為連関は一時的な行為連関であり、持続的ではない。しかし、旅行会社の男とさくらとの行為連関は一時的であったとしても、旅行会社と言う交換システムがそれとして機能する限り、他の人々との間での類似した行為連関は常に形成される訳であり、つまり不特定多数の人間との間には行為連関は持続的に為されるのである。

それはあらゆる交換システムについて言える事であり、或る交換システムが機能する限りは、それは持続的に様々な不特定多数の人間との間に類似した行為連関を形成し続けるのである。

富永は先に引用した様に、同じ書物の別の箇所でヴェーバーを引用しながら、社会的行為は不特定多数の人間に対する行為も含むと言った意味の事を述べている。社会的行為が不特定多数の人間を相手にする行為も含むのであるならば、交換システムによって生み出される行為連関も社会的行為であると言う事になるのではないだろうか。

私は先に意味への行為も社会的行為であると述べたが、既に述べた様に、意味への適切な行為が可能であるのは、

その人間が人間社会の中で人間によって育てられたが故であるからであり、つまりその過程でその人間の社会化が為されたが故であると述べた。つまり、意味への適切な行為は、その前提に何らかの他者との関わりがあったが故に可能になったのであり、つまりそれは既に他者との間の相互行為、あるいは行為連関を前提にしているのである。すなわち意味への適切な行為は、他者（多くの場合は親であるが）との行為連関の結果であり、ヴェーバーの言う「行為者によって考えられている意味の上からいって他者の行為と関係をもち、その経過においてこれに指向しているような行為」（先の富永健一の著作の引用から）であると言える。

先に交換システムと市場は同じではないと述べたが、私の言う交換システムは市場も勿論含むが市場よりも広い概念である。例えば、企業の中で働く事もその企業と言う交換システムによって媒介された行為である事になる。つまり、労働をすることによって、企業マンは給料を貰っている訳であり、労働をすると言う行為の代償として給料を得ているが故にそれは交換システムを介した行為であると言う事になる。

社会と交換システムをイコールで結ぶ事は出来ないが、社会が現在有る形で有るのは諸々の交換システムに依る事が多い。既に述べた様に、交換システムが自らを機能させるために諸々の意味を集め、あるいは新しい意味を生み出したりする。旧国鉄は新幹線と言う新しい意味を生み出したし、また今のＪＲは国鉄が生み出した新幹線よりももっと早い「のぞみ」を生み出した。それらは国鉄とかＪＲと言う交換システムが、自らをより有効に機能させるために生み出した物であり、そのことによって人間の行為形態や生活形態が大きく変わった。

さらに交換システムは自らを機能させるために、システム内に諸々の行為連関を形成する。人間の日常的な様々な行為はそうした交換システムによって規定された場合が多い。例えば、サラリーマンが日曜日に一日中テレビの前でゴロゴロしてテレビを見ると言う様な行為をする場合に、そのこと自体は交換システムによって規定された行為ではないが、一週間の殆どの日に交換システムによって生み出された行為連関の中に組み込まれて、その中で規定された

行為をした結果、一週間の疲れがたまって、日曜日にはそのようにゴロゴロすることによって一週間の疲れを取る行為をせざるを得ない。すなわち多くのサラリーマンに見られるそのような日曜日の行為は、間接的に交換システムによって規定された行為であると言える。あるいはサラリーマンが日曜日に妻とスーパーへ買物に出掛けると言う行為についても同じ事が言える。

先に第四十九作目の「寅次郎の縁談」を例に出して述べた時に、あるいは第十七作目の「寅次郎夕焼け子焼け」について述べた時に、社会に依る強制と言う事に関して述べた。すなわち、「寅次郎の縁談」に関しては、その冒頭の所でさくらと博の子供である満男の就職の問題が描かれており、また「寅次郎夕焼け子焼け」では日本画の第一人者である青観が上野の一杯飲み屋で代金を支払わずに店を出ようとした所を店の女に咎められる場面が描かれている。それらは社会に依る強制であると述べた。社会に依る強制と交換システムとはどのような関係が有るのであろうか。

交換システムは様々な行為連関を形成すると言う事については既に述べた。今述べた「男はつらいよ」の二つの作品の後の方についてであるが、青観が上野の飲み屋で酒を飲んで、代金を支払わずに店を出ようとして店の女に咎められたのは、まず飲み屋と言う交換システムによって規定された行為連関、すなわち飲み屋で酒を飲むと言う行為と、その行為の代償としてその代金を店に支払うと言う行為連関を無視したからである。すなわち交換システムは既に述べた様に、そのシステムが機能するための行為連関を形成するのであり、その行為連関を無視したり遂行を怠ったりした場合には、何らかの罰則が加えられる。つまり交換システムが、自らが正常に機能するためにその中に形成する行為連関を遂行することを何らかの形で強制するのは、社会の中枢が交換システムによって形成されているからである。

幾つかの交換システムは相互に依存し合っていて、そうした交換システムの相互連関の全体が社会であると言える。それは例えば、「寅次郎心の旅路」に出て来る旅行会社と航空会社との間に何らかの相互依存的関係が形成されてい

る如きものであり、そうした交換システム相互間の関係が社会を形成していると言える。

先に述べた、「寅次郎夕焼け子焼け」の場合での青観の飲み屋での行為、つまり酒を飲んでその代金を支払わなかったと言う行為の場合、すなわち酒を飲むと言う行為に連関する代金の支払いと言う行為の欠如の場合に、そうした行為、あるいは行為に連関する行為への欠如への咎めを為すのは、飲み屋と言う交換システムであるが、しかしその交換システムは他の交換システムと独立している訳ではなくて、他の何らかの交換システムとの間に何らかの相互依存的関係が有るはずである。例えば、肴のねたを仕入れる何処かの魚市場との間の相互依存的関係等々の関係が有るはずである。そのようにそれぞれの交換システムは相互に依存関係に有る。そしてそれぞれの交換システム相互の何らかの関係性自体が社会であると言えよう。

従って、青観の飲み屋での行為連関の欠如を咎めるのは、具体的には飲み屋の女であるが、その背後に有る交換システム、あるいは交換システム間の相互依存関係としての社会である。

そして「寅次郎の縁談」の冒頭に出てくる満男の就職の問題についてであるが、既に述べた様に、（「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」『徳山大学総合経済研究所紀要第二十号』参照）大学なり高校なり、学校を卒業した者が何処かの会社、つまり何らかの交換システムに属する様に強制するのは社会である。と言っても社会なる物が実体として実在して、それが学校新卒者を強制して、何処かの企業に就職する様に仕向ける訳ではない。システムとしての、あるいはシステムの相互依存的連関としての社会は、それらの交換システムが機能するために常に人間を必要としているのであり、常に人間を補充する必要が有る訳である。交換システムは一度それが形成されて、意味を集合せしめ、何らかの行為連関をその中に形成するならば、それはあたかも人格的主体の様に機能するのであり、そしてその機能に必要な人間を補充する様に要求するのである。

社会を今有るがままに形成しているのは交換システムであるが、既に述べた様に（「寅さんの社会学」『徳山大学論

叢第四十九号』参照)、交換システム外の行為も可能である。第三十九作の「寅次郎物語」での寅次郎の行為、つまりかつての同業者の息子の母を探す旅に出る様な行為、あるいは「寅次郎夕焼け子焼け」での寅次郎の行為、つまり二百万円を騙し取られた芸者ぽたんのために、日本画の第一人者青観に絵を描く様に頼みに行く行為等々、の様な行為は交換システムによって規定された行為でもなく、また交換システムへと還元される行為でもない。それらの行為は社会から与えられた行為ではなくて、寅次郎自らが行為の遂行を為す事による役割の創造であるが、その場合でも寅次郎は何らかの形で何らかの交換システムを利用せざるを得なかった。「寅次郎物語」では、かつての同業者の息子である秀吉を連れて旅に出る場合にＪＲを利用せざるを得ないし、また「寅次郎夕焼け子焼け」の場合では、寅次郎が青観の所に行くのにバスを利用せざるを得なかった。あるいは「寅次郎恋愛塾」で、寅次郎が若者の恋を成就させるために若者に恋愛の作法を教える場合でも、彼は映画館とかレストランとかの交換システムを利用せざるを得なかった。つまり、交換システム外での行為を為す寅次郎の行為を大きく規定するのは交換システムであり、それ故に寅次郎が為す様々な交換システム外の行為、あるいは交換システムによって規定されない行為を為す場合でも、何らかの交換システムの影響を受けざるを得ないのである。

そうした交換システム外の行為は言わば派生的な行為であり、社会の中枢に関わる行為ではない。「男はつらいよ」シリーズではむしろそうした交換システム外での行為が中心になるが、しかしそれは社会の中枢を為す行為ではない。

そして合理的行為と非合理的行為を別つ分水嶺は、この交換システムである。ヴェーバーは合理的行為を「伝統的行為」「感情的行為」「価値合理的行為」「目的合理的行為」の四種類に分類する。そして最も合理的な行為は目的合理的行為であるとする。目的合理的行為とは、「はっきりと分節化された価値地平から自分にもっともよいと思われる目的（この意味では広義の功利的目的）を選択し、目的と手段、目的と随伴的効果などを合理的に比較考量してなされる」（青井和夫『社会学原理』）行為である。ヴェーバー自身の言葉で表現すると、「我々が人間的行為を、『目的』

の明確な意識や意欲と共に『手段』の明確な認識によって制約されたものとして『理解』するとき、疑いもなくこの理解には特に高度の『明証性』が与えられる。」（ヴェーバー『ロッシャーとクニース』）と言う事になる。ヴェーバーは合理的行為として、呪術的な手段に訴えて不可思議な力を借りる様な原始的な手段から解放されて、技術的手段と計算と言う方法に基づいて目的の達成のために有効な手段を行使する行為を目的合理的行為であるとして、最も合理的行為であると考えた。

こうしたヴェーバーの言う目的合理的行為を具体的に実現するのが、ここで言う交換システムであると言える。あらゆる交換システムの中には明確に目的とそのための手段とが存在している。病気の場合には医院か病院と言う交換システムに行き、治療代を支払えば、医学と言う科学的訓練を受けた医者が治療してくれる。つまり、病気の治癒と言う目的の達成のために、患者は病院なり医院へ行って、そこで必要な治療代を支払うならば、病気の治療と言う目的は達成される。前に述べた第三十九作目の「寅次郎物語」で、旅の途中で病気になった秀吉の治療のために、寅次郎はさくらに言われて夜中に医者を呼び、治療してもらうのだが、その寅次郎の行為は医院と言う交換システムを介しているが故に合理的であると言える。すなわち病気の治療と言う目的のために適切な交換システムを利用した訳であり、その点で合理的行為である。ただ、寅次郎の秀吉を連れての母探しの旅は、その手段としてＪＲを利用したり、旅館を利用したりする限りでは合理的であるが、その旅全体、つまり秀吉の母探しの旅そのものは如何なる交換システムも介していないので、合理的行為であるとは言い難い。ヴェーバーの目的合理的行為の定義からするならば、寅次郎のその行為は目的の設定がまず適切ではない、つまり寅次郎と言う一私人が、寅次郎にとって他人である子供の母親を探すと言う目的自体が合理的ではない、と言う事になる。そうした行為を為す公の機関が存在する（映画の中にも登場した）のであり、そうした役割の遂行を社会から委託されている機関に任せる方がより合理的であろう。つまり他人の子供の母親を探す等々の面倒を見る公的機関である「児童福祉相談所」と言う交換システム（公的

機関もやはり一種の交換システムである）を介して、その公的機関が子供の母親を探すなり、その子供を何らかの形で保護する場合には、その公的機関によって設定された目的は合理的目的であり、従ってその公的機関である交換システムによって規定される行為、あるいは行為連関は合理的行為である、と言える。それ故に、寅次郎の秀吉を連れての母探しの旅と言う行為は、寅次郎が設定した目的が非合理的であるが故に、非合理的であると言わざるを得ない。だからと言って、寅次郎の行為の価値が損なわれると言う事は無い。或る行為が合理的か非合理的かと言う事と、その行為が価値的かそうで無いかは別問題である。

また第三十三作目の「口笛を吹く寅次郎」では、寅次郎が僧侶になる場面が有るが、それに関して述べた所で（「映画『男はつらいよ』の社会学的分析」『徳山大学総合経済研究所紀要第二十号』）、法要の場が一種の交換システムであると述べたが、それは儀式としての法要の場が儀式の遂行の場としての意味を有する限りにおいて、一種の交換システムであると言う意味である。つまり法要の場に僧侶を呼ぶ人々は僧侶に対して儀式以上の効果を期待していない訳であり、従って儀式の遂行のみを僧侶に期待し、その代償としてお布施を僧侶に渡す事によって法要と言う儀式は完成するのである。その意味で法要の場は交換システムであり、そこで法要と言う儀式を遂行する僧侶も、僧侶を呼んで法要をしてもらう檀家の人々も、合理的行為を為しているのである。

そして「寅次郎夕焼け子焼け」での寅次郎の行為、つまり悪い男に二百万円の金を騙し取られた可哀相な芸者ぼたんのために一流の画家である青観の所へ、絵を無料で描いてもらう様に頼みに行くと言う行為（「寅さんの社会学」『徳山大学総合経済研究所紀要第二十号』参照）は、画家と画商との間に形成された或る種の交換システムを無視した行為であるが故に、非合理的行為であると言う事になる。通常の場合、絵の価格を画商が決定し、その価格を画家が承認することによって画家と画商の間の取り引きが成立するのであり、そうした交換システムを介する行為が合理的行為である。

六七

このように合理的行為と非合理的行為とを別つ分水嶺が交換システムであり、ヴェーバーの言う合理的行為を遂行するより具体的な社会的機構が交換システムである。つまり、交換システムを介した目的の設定と、その目的の達成のために何らかの交換システムを媒介にする行為が合理的行為である。

【4】時間的差異としての社会

時間について既に（「映画『男はつらいよ』の哲学的分析」『徳山大学論叢第四十八号』参照）述べた様に、ここでは人間的主体の意味へ向かっての絶えざる現在の乗り越えであると規定する。その現在の絶えざる乗り越えが現在を過去へと移行させ、また未来を到来させる。そうした人間主体の絶えざる時間性の行使は社会の中に常に差異を生ぜしめる。既に述べた様に、社会は意味の集合態であり、そしてそれは人間の絶えざる意味への行為によって維持されて、社会の現在の形態が存続しているのであるが、人間の絶えざる意味への行為の遂行は、つまり時間性の行使は、意味の集合態の中に絶えず差異を産出せしめるのである。卑近な例を挙げると、例えば〈私〉が或る所で自動販売機に金を入れて、ビールを買うとする。その場合、〈私〉は自動販売機と言う有意味的な物へと行為する訳であり、すなわち〈私〉と言う人間的主体による時間性の行使であるが、その事によってそこに在る自動販売機の中に有った缶ビールの一つが減少して、それの中身は〈私〉によって飲まれたのであり、その事はつまり〈私〉が居る社会を構成している缶ビールと言う有意味的な物が一つ社会から消え去ったと言う事を意味する。つまり〈私〉による自動販売機の中の缶ビールを飲むと言う、意味への行為は自動販売機の中に有った缶ビール一つを減少させると言う差異を生んだ訳である。差異とは文字通り違いと言う事であり、従って、時間性とは社会の中に（自然の中でも勿論良いのであるが、ここで問題にしているのは社会なので、社会に限定する）以前とは違う何かを生み出すと言う事である。その以前が十年前であろうと、一秒前であろうと構わない訳で、とにかく以前と今との間に何らかの違いを社会の中に

生ぜしめる事が時間性を行使する事である。

そうした人間の諸々の行為は既に述べた様に、かなりの部分が交換システムによって規定されている。交換システムはそれに属する人間の諸々の行為や行為連関を生み出し、あるいは規定し、そのことによってシステム内に集められた諸々の意味への人間の関わりを規定する。そしてそのことによって交換システムは大規模な形で社会の中に差異を生み出す作業を人間に仕向ける。交換システムは行為連関を体系的に組織して、そのことによって大規模な形で新たな意味を社会に生み出し、またそのように生み出された有意味的な物を様々な人間の社会的行為の中へと還元する様に仕向ける。つまりそのようにして生み出された品物を購買者に売る事によって、人々の日常的生活の中へと組み入れる。すなわち交換システムはそのようにして差異を大規模に社会の中に生み出す。

交換システムがその本来の機能を果たすと言う事は、そのように常に社会の中に何らかの差異を生み出す事であり、つまり人間が相互に行為連関を体系的に組織して、体系的に差異を生み出す事である。すなわち交換システムは人間の時間性、あるいは意味への行為の仕方を体系的に組織して、体系的に社会の中に差異を生み出す事である。そのように体系的に社会の中に差異を生み出す事によって、交換システムは機能するのであり、あるいはそうした交換システムの相互依存である社会がそれとして正常に機能すると言う事である。

このように人間の時間性が何らかの交換システムに規定され、大規模な形で社会の中に差異が生み出される様になったのは近代に入ってであり、産業革命以降の事である。

アメリカの未来学者である、アルビン・トフラーは彼の著書『第三の波』の中でそのことについて次の様に述べている。

「農業時代の人々は、種子を播く時期と収穫する時期を知る必要から、長い時間の測り方については、驚くほど精密なものを作り上げた。だが人間同士の労働の同時的連携は厳密にやる必要がなかったので、短い時間については精

六九

密な単位はほとんど持たなかった。

中　略

産業主義社会では『主の祈りの間』の曖昧さに、時・分・秒という極めて厳密な単位が取って代わった。こうした新単位は規格化、標準化され、季節や地域には関係がなくなった。今日では、全世界がきちんと時間帯によって分けられている。『標準』時間という言葉もよく使われる。地球上を飛び回るパイロットたちは、彼らの隠語でいう『ズールー時間』すなわちグリニッジ標準時によって動く。グリニッジは、国際会議によって、地球上のあらゆる時差を測る基点と定められた。何百万という人々が、ある時間になると一斉に、まるで唯一の意志に動かされているように時計を一時間遅らせたり進めたりする。われわれ内部の主観的な感覚が、一定の長さの時間を時には長く、時には短く感じるのとは無関係に、『一時間』は唯一の、互換可能で規格化された単位になった。」（アルビン・トフラー『第三の波』）

農業時代ではそれぞれの人が適当な時間に労働に出たので、それほど正確な時間の単位は必要無かったが、産業革命以降商品を大規模に生産する事が可能になると、共同で仕事をするためにそれまでよりももっと正確な時間単位が必要になり、それが先の引用で述べられている時間単位である。

様々な交換システムで互いに共同することによって体系的に働く事、すなわち体系的に社会の中に差異を生み出して行く事が可能であるのは、こうした厳密な時間単位に依ってである。そうした時間単位は人々の相互的行為連関を可能にし、相互の時間性の行使の仕方を調整することが出来る。そうした時間、あるいは時刻を私は時間の意味化と名付けた（拙著『意味の現象学』参照）。

勿論人間による時間性の行使による、社会の中への差異の導入はそれ以前から行なわれて来た。社会の中への差異の産出は基本的には循環的であり、個々人による意味への行為に基づく何らかの差異の産出も、毎日の生活の中で多

かれ少なかれ循環的な性格を有している。日常的生活の中で人間が行なう行為のパターンは一般的には循環的であり、類似した事の繰り返しである場合が多い。それは交換システムの中での体系的な差異の産出の場合も同様である。ビール工場では毎日同じプロセスが繰り返されて、小さい単位の工程では常に差異が生み出されているのであるが、全体のプロセスでは毎日同じ事が繰り返されている。

しかし社会の形態は徐々に変化して来たのであり、それはそうした人間が行為することの繰り返しの中に大きな単位での差異が導入された結果である。例えば現代のビール工場の中で行なわれている組織化された行為連関に基づく体系的な差異の産出のプロセスは、個々の作業によって生み出される差異を包む全体の工程は毎日同じ事の繰り返しであるが、そうした同じ工程の繰り返しの中に徐々に差異が導入されて、全体の工程の中に何時の間にか差異が導入されているのである。同じメーカーのビールでも三十年前のビールと現在のそれとは同じではない。三十年前には缶ビールなどは存在せず、瓶ビールだけだった。つまりそこに三十年前と現在との間に差異が存在している訳であり、そのことは同じ工程の繰り返しであるビール工場でのビールの生産と言う差異の産出の循環の中に、さらに差異が導入されたと言う事を意味する。

それと同じ事が歴史的なプロセスの中でも言える。歴史が扱うのは政治的な形態の変化だけではなくて、社会の形態の変化もその考察の対象である。人類の歴史的過程以前でも、狩猟を生活の手段としていた時代から農業時代への移行は、社会の形態の大きな変化であり、それはその時代に属していた人々の生活の中で、同じ事の繰り返し、つまり同じ差異を生活の中へと導入するプロセスの中に、そのプロセスそのものを差異化する事態、つまり差異化のプロセスそのものが差異化されると言う事が生じる事によってである。

例えばグーテンベルクが印刷機を一四四五年に発明したが、金属活字を鋳造によって大量に生産出来、それに金属活字が一字ずつ離して何度も組み替える事が出来る事により、それまでの木版に一字一字を刻み付ける様な印刷方法

と比べて飛躍的に印刷技術が発展した。つまりグーテンベルクの発明とされている印刷機が当時の社会に出現することによって、それまでの印刷すると言う行為、あるいは社会の中への差異の導入に、新しい差異を導入して、何かを印刷すると言う行為、差異の産出のプロセスそのものを差異化させたのである。

またイギリスのジェームス・ワットが一七六五年に蒸気機関の改良を行うことによって、紡績工場に大きな変化を齎らして、やはりそれまでの紡績工場に差異を導入して、差異化のプロセスそのものを差異化した。

このように歴史のプロセスは、それまでの差異のプロセスそのものの差異化の歴史であると言える。そしてそうした差異の差異化は、人間の時間的な差異化を差異化したのであるが、つまり人間の意味への行為としての時間性の行使の仕方に変化を齎らしたのであるが、それと同時に人間が社会の中へ導入する差異の種類を多くして、人間が社会の中へ齎らす差異化の仕方を差異化した。今述べた差異の差異化は、言わば社会の中に新しい意味を導入することであり、それが人間の日常的な行為の仕方に浸透することによって、人間の行為の仕方が多様になり、あるいは社会の中に差異を導入する仕方そのものの差異化が行なわれて、差異化の種類が多様になった。これを伝統的な表現の仕方で述べると、分業化と言う事になる。分業とは、今までの私の表現の仕方を用いるならば、歴史のプロセスにおいて生じた差異の差異化の結果、人間が社会に齎らす差異化の仕方の多様化と言う事であり、差異化の仕方の差異化が社会の中で生じたと言う事である。もっと分かり易い表現を用いると、人間の意味を持つ物への行為の仕方が、意味の種類の増加によって多くなり、人間が社会の中で為す事が色々と増えたと言う事である。

つまり新しい意味が、あるいは新しい意味を持つ物が社会の中に定着し、人間の諸々の行為連関の媒体になった場合、人間の新しい行為の仕方が社会の中に出現したと言う事になる。例えば、少し古い所ではテレビの出現とそれの社会の中への定着によって、それまでの人間の行為の仕方には無かった行為のパターンが出現した事になる。それまでは家庭ではラジオを聞くと言う行為は有ったが、画面を通して映像を見るためには映画館へ行かなければならなか

った。家庭で映像を見ると言う行為が可能になったのは、テレビの出現に依る。また最近ではワープロの出現で文字を書くと言う行為に変化が生じ、またコンピューターの出現によって、さらに様々な形での新しい行為の形態が出現した。その様に、こうした今まで無かった新しい意味が出現して、それが社会の中に定着することによって、人間の行為の形態が変化して、それと共に人間の行為の仕方が多様になった。つまり、新しい意味の社会の中への出現によって、行為のパターンが多様化して、そしてその事は、社会の中に差異を導入する仕方そのものの差異化が生じたと言う事を意味する。何らかの行為を為すと言う事は、社会の中に何らかの差異を出現させると言う事であり、そして行為は意味によって規定されるが故に、新しい意味の社会への出現は新しい行為の仕方の社会への出現を意味し、それは新しい形での差異を社会の中に導入することである。新しい形での差異を社会の中に導入すると言う事は、既存の行為の仕方とは違う行為の仕方が社会の中に出現したと言う事であり、すなわち既存の行為との間に何らかの差異を有する行為の仕方が社会の中に出現したと言う事であり、つまり行為相互間の差異が多様化した事を意味する。

そのことはつまり、交換システムの種類が増えたと言う事であり、現代社会には多様な交換システムが存在している訳であり、そうした事は今まで述べた様に、人間の行為の仕方の種類が増えたと言う事である。

そうした時間性から今まで述べた社会の規定を基礎付けてみよう。まず意味についてであるが、意味が意味として社会の中に存在するためには、既に述べた様に、それへの行為が有るが故であり、意味はそれが何らかの意味を有する限りは、人間のそれへの行為を誘発して、それへの行為を完成させるからである。つまり意味とそれへの行為は相互依存的であり、両者相俟って社会の中に存続するのである。時間性とは意味への何らかの行為と、意味からの離脱によって構成されると言う事については既に述べた通りである。つまり或る意味へ向かって行為することから、別の意味へ向かって行為することへと行為の仕方を変更することは、初めの意味から離脱することであり、つまり初めの意味への〈私〉の行為を乗り越える事であり、そのことは初めの意味へと行為していた〈私〉の行為を過去へと齎ら

すことによって、その意味へと行為していた現在を越える事である。すなわちそのことによって〈私〉は社会の中に差異を導入したのである。つまり、或る意味からの〈私〉の離脱によって、その意味との共同で形成していた現在の乗り越えを為す事であり、そのことはその意味を〈私〉の過去に属する意味として〈私〉の現在から追い払う事である。つまりその意味へと行為していた〈私〉の行為を、〈私〉が別の意味への行為へと行為の仕方を変更することによって、〈私〉は何らかの仕方で社会の中に差異を出現させたのである。

例えば、テレビを見ていた〈私〉が、そのテレビの番組がつまらなくなったので、テレビのスイッチを消して、読みかけの本を手に取ってその本を読みはじめる場合、〈私〉の行為はテレビから本へと移行するのであり、つまりテレビを見ると言う行為をしていた〈私〉の現在を乗り越えて、本を読むと言う行為を為す自分を構築する場合に、〈私〉はテレビのスイッチを消すと言う差異を社会の中に導入することによって、テレビを見ていた〈私〉の現在を追い越す事により、それを過去へと追いやるのである。そして本へと向かう〈私〉の行為は本を読むと言う〈私〉の未来を〈私〉へと到来せしめる。つまり〈私〉はテレビと言う有意味的な物から本と言う有意味的な物へと向かう事によって、〈私〉は社会の中に差異を生み出すのである。

従って、意味は未来を到来せしめ、それと共に現在を過去へと追いやる事によって意味で有り得るのである。あるいは現在の中に差異を導入することによって、現在を過去へと追いやり、未来を到来せしめて、それを現在化する限りにおいて、つまり差異を生み出す限りにおいて意味である。差異とは意味の差異であり、差異が差異である基準は意味なのであり、つまり〈私〉の現在を構成している意味が〈私〉の現在から離脱する限りにおいて差異化される訳であり、あるいは別の意味が新しい現在を〈私〉に到来する限りにおいて差異が導入される訳である。すなわち、〈私〉の行為によって追い越された意味は、〈私〉の現在に属さない意味なのである。それは〈私〉の過去と共に過去に属するのである。つまりそれは過ぎ去った〈私〉の現在に属する物として〈私〉は位置付ける。

言い換えるならば、未来が〈私〉へと到来して、現在が過去へと移行するのは意味への行為と意味からの離脱に依るのであり、それは〈私〉に依る意味への行為と意味からの離脱に基づく。それ故に、そうした〈私〉と言う人間主体の行為に依って意味は意味であるが故に、意味は〈私〉と言う主体の時間性に基づいて意味であり得るのである。つまり意味は行為に対して意味であり、従って未来を到来せしめ、そのことによって現在を過去へと移行せしめる〈私〉の時間性の行使に基づいて意味は意味であり得るのである。

そして行為連関は意味への行為連関であり、あるいは意味を介した行為連関である。既に述べた様に行為連関は意味に基づく。或る行為と或る行為とが連関する場合に、先の行為がどのような意味への行為であるかに依って、それと連関すべき行為の仕方が規定される訳であり、既に述べた「寅次郎夕焼け子焼け」に登場する日本画の大家である青観の上野の飲み屋での行為、つまり飲み屋で酒を飲むと言う、先立つ行為と連関すべき行為、つまりその店に勘定を支払うと言う行為が欠如していたが故に、青観は店の女に咎められたのである。すなわち飲み屋で酒を飲めば、それと連関する行為としてその代金をその店に支払うと言う行為を為さなければならない。つまり先立つ差異化の行為に対して、それと連関する差異化を為さなければならない。飲み屋で酒を飲むと言う行為も一種の差異化であり、つまり社会の構成態の一つである酒を飲む事によって社会の中に差異を導入したのであり、それに関連する差異化、つまり代金を支払うと言う差異化を社会の中に導入すると言う事をしなければならないのである。

行為連関において、先立つ行為が為す差異化がそれに続き、それと連関する行為が為す差異化とが対応していないと、或る行為とそれと連関すべき行為とが相互に連関し得ない。先に述べた例で言えば、第十二作の「私の寅さん」の冒頭でのさくら達の九州旅行の場合に、さくら達が飛行機で大分空港まで行くためには、それに先立つ行為としてさくらが旅行会社に行って四人分の大分空港への旅行券の購入を申し込むと言う行為をしなければならなかった。その行為も社会の中への差異の導入であり、つまり購入可能な航空券をさくら達が購入することを旅行会社に申し込む

事によって、その特定の日に大分空港へ行く予定の飛行機の席を四人分購入することを言わば社会へと宣言することになるのである。あるいはさくら達が或る特定の日に大分へ飛行機で行く事を、旅行会社に宣言することによって、その旅行会社にそれまではなかった業務を課する事になる。つまり旅行会社に新しい仕事を課すると言う意味でさくらのその行為は社会の中に差異を導入することになるのである。

そしてさくら達が航空券を手に入れるためには、さくらが或る旅行会社に航空券の申し込みをすると言う行為に対応して、旅行会社の職員がその航空券を航空会社から購入すると言う行為が為される。つまりさくらの行為に対応する旅行会社の人間の行為によって、それまでは空席であった或る特定の日の大分行きの飛行機の四人分の席が予約されると言う差異が社会の中に導入される。その旅行会社の人間の行為は、さくらの行為と連関する行為であり、すなわちさくらが社会の中に導入した或る差異に対応する差異を導入することによって、さくら達が大分行きの飛行機に乗る事を可能にしたのである。すなわちさくら達が大分行きの飛行機に乗ると言う未来を到来せしめる事を可能にする差異化がそこでさくらの行為と連関した形で為されたのである。

従って、行為連関は時間性の行使としての社会の中に差異を導入することに対応する差異化が為される事である。あるいは或る差異を社会の中に作り出す事によって、その差異に対応する行為が、つまりその差異に対応する差異化の行為が可能になるのである。すなわち社会の中で或る社会的行為が可能になるためには、それに先立ってその行為が成立し得るための差異化を社会の中に導入する必要が有る。行為と行為が相互に連関するためには、後に続くべき行為が可能になるための状況が、つまり或る差異が既に社会の中に導入されていなければならない。

そして三番目に交換システムに関してだが、既に述べた様に交換システムが先立つ二つの社会についての定義よりも根源的である。交換システムはそれが機能するために必要な意味を特定の場所に集合せしめ、さらにそれらの意味へと行為する仕方を、つまり行為連関を規定する。交換システムはそのようにしてその中に組み込まれている人間が

為す差異化の作用を体系的に為す事によって、社会で生ずる時間性の行使をより秩序立った物にする。しかし、交換システムはまた人間相互の時間性の秩序立った行使としての、社会の中へ常に差異を導入することによって、それが正常に機能することを可能ならしめる。そしてその社会の中へ体系的に差異を導入することは反復される。先に述べた、さくらが行った何処かの旅行会社は、さくらだけではなく、不特定多数の人間に航空券や様々な切符を売ると言う体系的な行為連関を持続することによって、交換システムとしての機能を果たしているのである。あるいはビール工場は毎日ビールを造ると言う体系的な差異の産出をすることによってビール工場と言う交換システムの存続を可能にしているのである。既に述べた様に、交換システムはそのように人間の時間性の行使、あるいは差異の産出をより体系的に為す事によって自らが機能することを可能にしているのであり、それが交換システムとして存続することを可能にしているのである。

【5】 寅次郎の時間性の特徴

寅次郎は香具師であり、香具師も組織らしきものを持っている様だが、しかし寅次郎の様々な行為を見ていると、その組織は近代的な会社の様にシステム的ではない様に思われる。寅次郎の特徴は、彼が何らかの近代的な企業に属している人々や、家庭を持っている主婦等々よりも自由人であり、多様な人々と常に出会うと言う事である。その例を「男はつらいよ」の中から幾つか取り出してみよう。

まず第八作目である「寅次郎恋歌」のタイトルが出る前の場面。

ある地方

ここはとある海岸の田舎町。

秋の長雨がシトシトと降り続いていて、人影もまばらである。
どこからか聞えて来るスリ切れたレコードの歌謡曲。
歌を歌った　帰り道
幼なじみの　あの山　この川
ああ　誰か故郷を思わざる

ある芝居小屋の表
坂東鶴八郎一座――古ぼけた垂れ幕や幟が雨にうたれている。その屋根にのっかった古ぼけたスピーカーが、客寄せのレコードを鳴らしたてているのである。
しかし出入りする人影もなく、静かな小屋の前の水溜りはいたずらに雨が小さな輪をつくるのである。
窓口に手書きの貼り紙――「本日昼之部都合により休演します」

同・中
狭い、古ぼけた小屋の中。
客席には誰もいない。
舞台の上では二・三人の男女が漫才のようなことをやっているが、その周辺には布団だの食器だのが転がっていて、七、八人の人間がゴロゴロ寝ている。
座長を前にして、莫蓙にあぐらをかいている車寅次郎。

寅　「いやね、あいにくの雨で商売も上がったりなんで、夕方まで楽しませてもらおうと思って来たんだが……」
座長　「そうでございますか……実は私ども三日前から御当地で興業をうたせていただいておりますが、何のたた

りか九月の長雨、とうとう本日は一人のお客もお見えにならないという次第でございます」

寅　「（大きく頷く）そうかい……そりゃあ気の毒になァ」

座長、深々と頭を下げる。

同・表　いつやむとも知れぬ雨が幟を濡らしている。

同・中

寅　「つれえ稼業はお互いさまだなァ、座長さん、なに、この雨だって長くはねえ、今夜のうちにはさっぱり上がって、明日は日本晴れだ、くよくよしねえで頑張ってくんな」

ポンと座長の肩を叩いて去ろうとするのを座長が呼びとめる。

座長　「お客様、傘をお持ちではないので……」

寅　「なァに、宿はすぐ近くよ、濡れてる暇にたどりつかァ」

座長　「いえ、それはいけません（舞台の方を向いて）これ、小百合」

「はい」

元気よく答えて走ってくる十六、七の娘。

座長　「当座の花形、大空小百合でございます、宿までお送りさせて頂きます」

小百合、その横でペコリと頭を下げる。

道　海岸沿いの道を、番傘を持った小百合と寅が寄りそって歩いてゆく。

七九

電柱に雨にうたれたポスターが寂しくたれ下がっている。

芝居小屋・中

舞台の上で座長を中心に立ちまわりの稽古をしている座員たち。

宿の表

小さな旅館の表に着いた二人、少女、頭を下げて去ろうとするのを寅が呼び止める。

寅　「ちょっと待ちな」

少女　「はい」

といぶかしげに立停る。

寅　「ねえちゃん、確か小百合ちゃんとか言ったな」

少女　「はい」

寅　「仕事は面白いかい」

少女　「はい、とっても」

寅　「辛いことはないかい」

少女　「はい、それは時にありますけど、でも舞台に立ったらみんな忘れてしまいます」

寅　「そりゃいい、そうじゃなきゃあいけねえよ、お前さん、きっと立派な女優さんになるよ」

少女　「ありがとうございます、私も頑張って早くテレビに出られるような俳優さんになりたいと思ってます」

寅　「うん、うん、大丈夫だとも……（とポケットから財布を出し、その中から五千円札をひっぱり出して差出

す）これ、ほんの少しだけどな、みんなで一杯やってくれって、そう座長さんに言って渡してくんな」

少女　「（びっくりして）あの……こんなたくさん」

寅　「いいんだ、いいんだ、あいにく旅先で持合わせがなくてすまねえ」

少女　「ありがとうございます（と受取って）あの、先生のお名前は」

寅　「なに、名のる程の者じゃねえよ」

少女　「でも、座長さんに叱られますから」

寅　「そうかい、それじゃあこう憶えておいてくんな……東京は葛飾、柴又生まれの車寅次郎、人呼んでフーテンの寅ってえしがねぇ旅鴉だってよ」

少女　「はい、フーテンの寅先生ですね」

寅　「ああ、そうだよ」

少女　「ありがとうございました、いただいて行きます、さようなら」

と何度も頭を下げながら雨の中を去ってゆく。

寅　「頑張れよ……しっかりやるんだぞ！」

涙ぐまんばかりの表情で見送る寅、少女の姿が消えるとホッと溜息をつく——

寅　「（顔をしかめて）あっ……間違えて五千円やっちゃった……」

ちくま文庫『男はつらいよ4』

次は第二十九作目の「寅次郎あじさいの恋」。マドンナはいしだあゆみ。

八一

八二

寅次郎は葵祭りの真っ最中の京都に居る。仕事を終えた寅次郎は鴨川の畔を歩いていた。そこへ一人の老人（片岡仁佐衛門）が下駄の花緒を切らして困っているのに出会う。

「おい、爺さんどうした。花緒が切れちゃったか、ええ。貸してごらん」

と寅次郎は老人から下駄を受け取る。

「おーお、ちびた下駄履いてるな、おい。買ってもらえねえのか、息子の嫁に？　しょうがないなあ、まあ直してやるよ。ちょっとここへ座ってろ」

と寅次郎は老人を座らせて、老人の下駄の花緒を直し始める。

「さて」

と言って、腹巻の中から白い布切れを取り出して、それを口で切りながら、

「なあ、芝居だったらこういう時、可愛い、綺麗な娘さんがすーっと現われて、『あら、御不自由でしょ。わたくしにお手伝いさせて下さい』とか言ってなあ、桃色のハンカチを取り出して、可愛い口元でピッと裂いたりするんだけどもよう、へへえ、この俺じゃあどうしょうもねえなあ」

と言って、老人の横に座る。

「でもまあ、爺さんも色気の方はもう卒業したんだろう、ええ」

と老人の顔を見て、笑う。

老人も苦笑いをする。

「ほら、出来たよ、足上げて」

と寅次郎は老人の足を上げて、それを布で払い、下駄を履かせる。

「えらい世話になってしもうて」

と老人は礼を言う。
「なあに、困った時はお互いよ」
二人は立ち上がって歩きだす。
寅次郎は老人の手を引いて、土手の上へ上がる。
「どうだ、疲れたんじゃないのか」
「大丈夫」
「そうか、どっかその辺で休んで行くか」
と二人は近くの茶店に入る。
「これ、もう一つどうだい、美味いよ、わりと」
と寅次郎は老人に菓子を勧める。
「そうか、爺さんが若い頃はもっと良かったか、葵祭りも。爺さんは若い頃、何やってたんだい？」
「私？　私は焼き物師や」
「ほう、じゃ、こうした茶わん、焼いてたんだ」
と手に持っている湯呑み茶わんを示して言う。
老人が頷くと、
「へーえ、そりゃあ大変な仕事だねえ。ありゃあ、薪割ったり、泥捏ねたりなあ。でも今はもう楽隠居だ、なあ」
と言うと、老人は、
「今でも働いています」
と言うので、寅次郎はびっくりして、

「その歳で？　なんだい、倅、楽させてくれねえのか、おい。困ったもんだなあ」
と言う。老人は、
「そんな事ではないねん、なんと言うたらええかいなあ、これ。中々ええ茶わんが焼けんのでなあ、この歳になっても」
と言う。
寅次郎は感心して、
「偉い！　その向上心がいつまでも若々しく歳を取らねえんだなあ。うちのあの年寄に聞かせてやりてえよ、今の言葉。いや、団子屋の職人をやってんだけどね、全然向上心てのが無いんだから。年々団子作るのがまずくなってくるんだから、味が。情けねえ」
と言って、立ち上がり、店の勘定をすませようとする。
「ああ、女将さん、御馳走さま、おいくらだい」
「ああ、いかんいかん、ちょっと、ちょっと、ここは私が」
「いいんだ、いいんだ、いいんだ、爺さん。今日は良い話を聞いたからな」
と言って、札を出して、
「つりはいらねえよ」
と言って、出て行く。
店の外に出ると、老人に向かって、
「爺さんよう、いつまでも達者でな。良い焼き物を作ってくれよ」
と言い、立ち去ろうとすると、老人が、

「ちょっと、ちょっと」
と寅次郎を呼び止める。
「なんだい」
と寅次郎は老人の方へ振り返る。
「あんた、今日これからなんか予定でもおすのか？」
「いゃあ、別に。これから宿へ帰って、一風呂浴びて、まあ仲間と安酒飲んで寝るだけだよ」
「ああ、さよか、ほんならなあ、今日まあ色々親切にしてもろうたお礼になあ、冷たいビールでもあげたいんやけど、ちょっとつきおうてんか」
「あ、気持ちだけいただいとくよ。ま、そんな銭があったら、孫に飴玉の一つでも買ってやんな」
「いや、じきそこや」
と老人は歩き出す。
「おい、爺さんよ、余計な気遣わなくても良いんだからさあ、な」
と寅次郎は老人を追い掛ける。
「いや、私な、あんたともう少し話がしたいんや」
と言って、老人は先を急ぐ。
仕方なく寅次郎は老人の後を付いて行く。
老人は高級料亭へ入って行こうとする。
寅次郎は驚いて、
「おい、何処へ行くんだよう。なんか勘違いしてんじゃないか、おい」

と老人の後から声をかけるが、老人はどんどんと中へ入って行く。
「こういう店は高いんだから止せって言うんだよう。橋のたもとの焼き鳥屋みたいな所で……」
と寅次郎が言い掛けると、店の中から何人かの店の女が出て来て、
「先生、お久しぶり、どないしてはったんどす」
と老人を迎えるので、寅次郎はびっくりする。
高級料亭の部屋で、老人は酒を飲みながら、寅次郎に向かって焼き物についての講釈をしている。
「土に触っているうちに自然に形が生まれて来るんや。こんな形にしようか、あんな色にしようかてな事を頭で考えているのとは違うのや。自然に生まれて来るのを待つのや。けどその自然が中々難しい」
聞いている寅次郎はすっかり酔っ払っていて、うわの空。
「そうは難しくないでしょう」
と呟く様に言う。
老人が横に居る芸者に酒をつがせようとすると、
「もう、お止めやす」
と止める。
「まあええって、大丈夫や、心配すんな」
と老人は言って、また焼き物についての講釈を始める。
「あのなあ、こんなええもん作りたいとかなあ、人に誉められようってな阿保な事を考えてるうちはろくなもん出来んわ。作るのやない、掘り出すのや。土の中に美しい物がいてな、出してくれぇ、はよう出してくれぇ、言うて、泣いてんねん」

と老人は感極まって涙ぐむ。

「なあ、寅次郎はん、寅次郎はん」

と目の前に居るはずの寅次郎を呼ぶが、寅次郎はいない。何時の間にか芸者の膝枕で寝ている。

寅次郎は気が付くと、何処かの家の部屋の中で寝ている。そこは昨夜の老人、実は焼き物の第一人者である加納作次郎の家だった。そこで寅次郎はこの映画のヒロインであるかがり（いしだあゆみ）と出会う。それ以降の話は省略する。

次は第二十六作目の「寅次郎かもめ歌」。マドンナは元キャンディーズの伊藤蘭。

北海道で仕事をしている寅次郎はかつての仲間が死んだ事を聞いて、線香をあげに奥尻へ行き、そこでその娘であるすみれ（伊藤蘭）に出会う。すみれは東京へ出て、定時制高校へ通いたいと言う。寅次郎はすみれを連れてとらやへ帰る。

そしてさっそく定時制の有る高校へ行って、入学案内を貰って来るが、入学するためには試験を受けなければならないと知って、一緒に高校まで付いて来たさくらに無理だと言う。

「どうだった」

とさくらが訊くと、すみれは、

「これ、願書。やっぱり入学試験が有るんだって」

と言う。

「あら」

「私、自信なくって」
「でも簡単なんでしょ」
「でも出来ない」
「ほら書いてある、簡単な試験って」
「どうしよう」
「大丈夫よ」
と二人は学校を後にする。
すみれは社長の紹介でコンビニで働く事にする。
夜、寅次郎が帰って来る。
「さくら、どうだった」
「お帰りなさい」
「うまくいったか？」
「うん、就職のほうはなんとかなりそう、パートだけどね」
「そうか、社長がちゃんとやってくれたのかな、で、高校の方はどうした」
「願書貰って来たわ」
と高校の書類を寅次郎に渡す。
「そうかそうか、そりゃあよかったよかった。俺なあ、入学祝い買ってきちゃったよ。いの一番に渡してやろうと思って。真っ白な運動靴なんだけど、これ喜ぶかなあ」
と寅次郎が言うと、さくらが、

「お兄ちゃん、まだ入学した訳じゃあないのよ」
「どうして？」
「編入試験が有るんですよ」
と博。
「それに合格して初めて決まるの」
とさくら。
「ええ、どうしてそんな事、もっと早く言わないんだよ、お前」
「私だって今日初めて知ったのよ、試験が有るなんて」
とさくら。
「試験があっちゃあ駄目だよ」
「どうして？」
「とおる訳ねえじゃねえか。中学もろくすっぽ行ってないんだよ。そうだろ。葛飾、柴又、帝釈天って字が読めないんだから。俺だってその字は読めるよ」
と言って、ふと振り返ると、丁度階段から降りて来たすみれがそこに居る。
寅次郎はびっくりする。
「ああ、すみれちゃん、ここに居たのか」
「人の恥、晒す事無いでしょ、馬鹿」
とすみれは怒る。
博が横から取り成す。

八九

「まだ五日有るんだし、これから勉強すれば大丈夫だよ」
寅次郎も頷くが、すみれは怒って二階へ上がってしまう。
寅次郎はおろおろして、
「おい、ど、どうするんだよ、お前。博、お前ちょっと勉強教えてやってくれ、勉強。さくら、お前、英語ぐらい知ってんだろ？　教えろよ。おばちゃん、おばちゃん、あの、帝釈様へ行ってさあ、入学出来る様に、お百度参りちゃんとやってくれよ。もうみんなで出来る事はちゃんとやっくれよ。そうだ、俺、社長に裏口入学相談してこよう」
と言って、寅次郎は裏の社長の家に行く。
「あーあ、大変だ、これから」
と博が溜息をつく。
次の日からすみれは勉強を始める。さくらに英語を教わっている。
「Alise came to」
「それを現在形に直して」
「come came come だから、Alise come to」
「違う違う、アリスは三人称だから動詞にエスが付くでしょ」
すみれとさくらの後ろで寅次郎が、隣りの工場の若者達が覗いているのを木切れで追い払っている。
帝釈天ではおばちゃんが寅次郎に言われた通りにお百度参りをしている。
夜、博がすみれに数学を教えている。
「FX＝－２Ｘ＋３と置けば？」
寅次郎が後ろでその様子を見ているが、眠たくなってうたたねをしている。

次の日、寅次郎は帝釈天へ行って、お参りをする。そこで御前様を見かけたので、
「御前様」
と近寄って行く。
「こちらは入学試験に効き目有るんですか？」
「入学試験？」
「うん」
御前様は考えこむ。
「ああ、駄目だ、駄目だ、こんな自信の無い顔じゃあ」
と言って、寅次郎は去る。
試験の日、すみれは二階で髪をといている。そして不安そうに考え込む。
「すみれちゃん」
とさくらの声がする。
「はい」
とすみれが返事をすると、さくらが二階に上がって来て、
「少し早いけど行きましょうかって」
と言う。
「はい」
とすみれは返事をして、出掛ける用意をする。
「すみれ、行くぞ」

九一

と下から寅次郎の声が聞こえる。
「はい」
とすみれは返事をする。
寅次郎は下で鏡で自分の顔を映している。そこへ社長が来て、
「もう行くのかい？　試験は六時からだろ？」
と時計を見る。
「こういう事はゆとりを持ってなァ、一時間ぐらい早く出掛けるんだよ。で、向こうでお茶でも飲んで、落ち着いた気分になって、それからだ、な」
そして何か思いついて、
「あっ、そうだ、そうだ」
と社長とおいちゃんの方を振り返る。
「今日一日はね、落ちるとか、滑るとか、転ぶとか、この手の言葉、一切口にするな」と言うとみんなは「分かった」と言う。
そこへさくらとすみれが降りて来る。
「忘れ物無いわね、あっ、願書は？」
とさくらは振り返ってすみれに訊く。
「はい、これ」
とすみれが願書をさくらに見せる。
「あっ、そういう物はバックにしまっておけ。おっことすといけないから」

と寅次郎が言うと、「あっ」と社長が声を出す。
「あっ！　おっことすなんて自分で言っちゃったよ。注意してるとどうしても口が滑っちゃうんだよねえ、あっ！滑っちゃったって自分で言っちゃった。全部言っちゃったよ、社長」
博がすみれに、
「机に向かったら大きく深呼吸をする。問題は出来そうなやつから手をつける。いいね」
とアドバイスをする。
「はい」
とすみれが返事をする。そして、
「寅さん」
と声をかける。
「さて、行こう、行こう」
と寅次郎がすみれを連れて出掛けようとすると、さくらが、
「これ、上履き、お兄ちゃんのも入ってる」
と新聞紙で包んだ物を渡す。
そこへおばちゃんが何処かから帰って来て、
「おや、もう行くのかい」
と声をかける。
「これ、お守り」
と寅次郎にお守りを渡す。

九三

「ああ、どうもおばちゃん、有難う」
と寅次郎がそれを受け取る。
「あの、色々すみません、じゃあ、行ってきます」
すみれがみんなに礼を言う。
「落ち着いてやれよ」
と博が励ます。
「大丈夫、大丈夫、きっとうまく行くよ」
と社長もすみれを励ます。
「有難う、じゃあ言ってくる」
と寅次郎が言って、二人は出掛ける。
「行ってらっしゃい」
とみんなが声をかける。
二人は橋の上を歩いて、学校へ向かう。寅次郎が時計を見ながら、
「ああ、それにしてもちょっと早過ぎたか。まあいいや、その辺で蕎麦でも食って腹ごしらえして、それから行くか、な」
と言う。
すみれが浮かない顔をしているのを見て、
「どうしたんだよ一体？　試験受けるのが恐いのか」
と訊く。

九四

「寅さん、私、止めようかな、だってどうせ駄目だもん」
とすみれは言って、橋の欄干の所へ行く。
寅次郎がすみれに近付いて、
「今頃そんな事言ってどうするんだよ。博だって一生懸命勉強教えてくれたんだろう」
と怒る。
「私、駄目なの。だって中学二年の教科書も出来ないんだから。どうってことないもん、高校なんか出たって」
とすみれは橋の上でうな垂れて、橋の下の川を見る。女子高校生が自転車で橋の上を通る。
「すみれ、お前、それで良いのか。本当にそれで良いのか？　あの娘の親父は大酒飲みで博打好きだ、親父が碌でなしだから、娘もぼんくらで、夜間の高校も入れやしねえ。お前、そうやって人に後ろ指差されて平気か？」
すみれは黙って首を振る。
「だろ」
と寅次郎はすみれの肩に手を当てて、高校への道を行く。
高校では定時制の生徒達が登校している。
寅次郎とすみれは学校の廊下で、うろうろとしている。
学校の人らしい人物（松村達夫）が通りかかったので、寅次郎は呼び止める。
「ようよう、小父さんよ」
男は振り返って、
「君、人を呼ぶのに小父さんって事は無いでしょ」
と言う。

「ああっ、すみません、小使いさん。あのー夜間の職員室ってのはどっちになるんでしょうか？」
「夜間って言い方は今はありません。それを言うなら定時制と言いなさい。ついでだけど小使いじゃなくて、主事と言って下さい」
「ああ、じゃその職員室ってのはどっちなんですか、主事さん？」
「僕は主事じゃありません。教師です」
「だったら初めからそう言ってくれりゃあいいじゃないか」
「定時制の職員室はこっちですから、付いてきなさい」
と男は行く。
「変りもんだなあ、おう」
と寅次郎はすみれを促す。
教室ですみれは一人っきりで試験を受ける。教室にはさっきの教師が試験監督として、すみれに試験問題用紙を渡して、
「時間はたっぷり有るから落ち着いて書きなさい」
と言い、椅子に座って、本を開いて読み始める。
すみれは試験を始める。
廊下では寅次郎が落ち着き無く、教室の中を覗いている。
そこへ一人の男が通りかかる。寅次郎は、
「こんにちわ、先生」
と挨拶する。

「いえ、僕、先生じゃないんです」
と男は言い、寅次郎にお辞儀をして行こうとする。
「主事さんでしょ？」
と寅次郎が言うと、男は、
「いえ、僕生徒です、どうも」
と言って、立ち去る。
すみれは教室で国語の試験を受けている。
すると教室のドアが開いて、寅次郎が顔を出して、教師に外に出る様に合図する。
教師は外に出て、
「なんだい君」
と不愉快そうに言う。
「先生、あの娘入れるかねえ、ここ？」
と寅次郎は訊ねる。
「さあ、そりゃあ試験の結果を見なきゃあなんとも言えんけどね」
「あの子ね、俺の死んだ友達の娘でさあ、この学校入ってもらわないと、俺ちょっと困るんだよな」
と言って、財布から何枚かの札を出して、教師のポケットに入れようとする。
「なんだいこれ？」
「いや、暇な時ちょっと駅前でパチンコでもやってよ」
「馬鹿」

と教師は受け取るのを拒否する。
「気持ちだからさあ」
「やめなさい」
と教師は教室の中へ入り、ドアを閉める。
寅次郎の腕がドアの間にはさまれて、
「あいたたた」
と声をあげる。
次は面接の時間ですみれが緊張した面持ちで座っている。その前に何人かの教師が座っている。すみれの横に寅次郎がやはり緊張して座っている。
「そんなに緊張しないで、気楽に答えてくれれば良いんだよ」
と教師の一人が言う。
「君は函館の道南商業を一年の時に中退してるねえ。どうしてやめたの？」
すみれは何か言おうとするが声にならない。
「何かあったの？　それとも……」
と別の教師が訊ねる。
横に居る寅次郎が口を挟む。
「それについてはわたくしの口から説明した方が良いと思うんですが、こいつの親父ってのは大変な野郎なんですよ。大酒飲みで、その上にねえ、博打気違いなんですよ」
すると前に座っている教師が、

「あなたねえ、何遍も言いますけど、口を出さないでいただきたい。私達はこの子に訊いているんですよ」
と寅次郎を叱責する。
寅次郎は不満そうに黙る。
「今度東京に出て来たってのはどういう訳？」
と別の教師がすみれに訊ねる。
「あのー、それは、寅さんが」
とすみれは小さい声で言う。
「寅さんってのは？」
と教師が訊ねる。
「寅さん、あたし」
と寅次郎がまた口を挟む。
「あのー、これにはねえ、色々と込み入った事情が有るん、訳有りなんだよ。あのー、江差知ってる？　北海道の江差。ほら、追分で有名な、ねえ。かもーめ」
と寅次郎は歌い始める。
「すいませんけどねえ、あなた出て行って下さい」
「なんで？」
「あなたが居ると口頭試問にならないんですよ」
と教師は寅次郎の腕を掴んで、外に出そうとする。
「冗談じゃあないよ。そっちの訊き方がいけねえんじゃないか、おっかねえ顔してよう。ここは警察の取り調べ部

屋かい？　この子は犯人じゃないんだからさあ」
と言いながら、外へ出される。
さくらが家で電話している。
「そんなにがっかりして帰って来たの？　困ったわねえ、ねえ、二人共寝ちゃった？　それじゃあ、また明日ね、はい、お休みなさい」
と電話を切る。
「どうしたって？」
と博が訊ねる。
「試験はほとんど出来なかったし、面接もろくに喋らなかったんだって。すみれちゃん、泣きべそかいて帰って来たらしいわ」
「試験の成績で落としたりはしないと思うんだけどな、そんなことで人間を評価しないのが定時制高校なんだ。発表はいつだって？」
「明日」
「今夜は眠れないな、兄さん」
次の日、すみれが高校から書類を持って出て来る。
そしてとらやに来て、さくらに、
「さくらさん、合格した」
と喜びに輝く顔で言う。
「本当!?」

とさくら。
「これ、教科書、みんなただでもらってきた」
とすみれは紙袋の中から何冊かの本を出す。
「まあよかったわね」
と言い、奥に向かって、
「おいちゃん、おばちゃん、すみれちゃん、合格したんだって」
と言うと、二人は出て来て、
「おめでとう、よかったね」
と喜ぶ。
「寅さんは！」
とすみれは寅次郎を探す。
「心配で心配で、じっとしていられなくて外へ出てっちゃったよ」
すみれは外へ飛び出して、江戸川の土手へ行く。

このようにして、すみれは定時制高校へ通うようになるが、北海道からすみれの昔のボーイフレンドが出て来て、すみれと結婚の約束をして、寅次郎の父性愛的な恋愛は終わる。
三つの作品を引用したが、これらに登場する場面は寅次郎が色々な人と出会うことによって、その人が関わる様々な交換システムに寅次郎も一緒に関わると言う事を示している。大部分の人は何らかの交換システムに属していて、一日の大部分の時間をその交換システムが規定する仕方で行為せざるを得ないが故に、彼が関わる人々は自分が属し

ている交換システムと関わりの有る人々である。そして彼がそうした人々と行なう行為連関も、彼が属している交換システムが生み出した行為連関である。また彼が自らの時間性に基づいて行使する差異化の作用も、交換システムによって規定された差異化の作用である。

現代社会はエーリッヒ・フロムによれば、封建的な階層秩序が崩壊した結果生じた個人の自由が許される事を特徴とする。しかし大部分の人々はそうした自由が重荷になり、それを何らかの形で何か別な物に委託してしまうことによって、自己の自由を放棄する。

「われわれは、資本主義が個人にもたらした新しい自由は、プロテスタンティズムの宗教的自由がすでにかれにあたえていた影響を、さらに発展させたものであることを示そうとした。個人はますます孤独に、ますます孤立するようになり、自分のそとにある圧倒的に強力な力にあやつられる、一つの道具となってしまった。かれは『個人』となったが、途方にくれた不安な個人となった。このかくれた不安が、あらわにでてくるのを抑えるのに役立つような条件はあった。まず第一に、それは自我をささえる財産の所有である。人間としての『かれ』とかれのもっている財産とは、離すことができなかった。衣服や家屋はかれの肉体の一部であると同様に、かれの自我の一部でもあった。自分はなんらかのものであると感ずることが少なければ少ないほど、より多くの所有物をもたなければならなかった。もし財産をもっていなかったり、失ったりすれば、それは『自我』の重要な部分を失うことであり、他人からも自分自身からも、一人前の人間とは考えられないようになるのである。」（フロム『自由からの逃走』）

寅次郎は現代社会の大部分の人々とは違って、多様な階層の人間に、多様な職種の人間に関わり、彼等が属している何らかの交換システムと接する機会を持つ事が出来た。

それは彼が自らの自由を拘束する交換システムに属していないからであり、言い換えるならば、差異化作用としての時間性の行使の仕方が何らかの行為連関の中に組み込まれていないからである。既に述べた様に、何らかの交換シ

ステムによって規定された行為の場合、社会の中への差異の導入は、それに先立つ差異に対応する形で為されなければならないし、またその後に続く差異に対応する形で為さなければならない。つまり交換システムが形成する行為連関の相互対応の中で自らの時間性を行使しなければならない。あるいはそのような形で意味集合態としての社会の中に差異を導入しなければならない。

ところが寅次郎の場合には、自らの時間性の行使としての差異の導入の仕方は、如何なる交換システムによっても規定されておらず、意味の中へ自らの時間性の行使としての差異を導入する場合に、彼は自らの行為の美学に基づいて為す。

例えば、先の「寅次郎かもめ歌」の最後の場面などはそうした寅次郎の行為の美学が彷彿として出ている場面である。

定時制高校に通うすみれに北海道から、かつてのすみれの恋人が現われる。すみれはその恋人と一晩共に過ごす。心配した寅次郎は一晩寝ないですみれを待つが、すみれは朝まで帰って来なかった。

朝早く帰って来たすみれは、おいちゃんとおばちゃんに謝る。

そこへ寝ていた寅次郎が目を覚ます。すみれは寅次郎の所へ行く。

「後免なさい。電話しよう、電話しようって何度も思ったんだけど……」

とすみれは言って俯く。

寅次郎はむっくりと起き上がって、すみれを睨む。

「誰かと一緒だったのか？」

すみれは頷いて、

「函館に居た時の友達でね、大工さんしてる人」
と言う。
「男か？」
と寅次郎は訊ねる。
「寅さんにも会ってもらいたかったんだけど、どうしても仕事があって、今朝の汽車で帰ってしまったの」
寅次郎は立ち上がって、
「それじゃあ一晩その男と一緒に居たんだな？」
とすみれを睨む。
「だって私、結婚するの、その人と」
それを聞いて寅次郎は、
「結婚！」
と呟く様に言う。
おばちゃんが間に入って、
「寅ちゃん、怒っちゃ駄目。今怒っちゃ可哀相だよ。ね」
と言って、おろおろして後ろに居るおいちゃんの方を見る。
寅次郎は黙って二階へ上がって行く。
そこへさくらがやって来る。
「あら、帰ってたの、すみれちゃん」
とさくらは自転車を店の前に置く。

「良い所へ来てくれたよ。寅ちゃんがねえ、物凄い顔して二階へ上がってっちゃったんだよ。ちょっと行ってくれる」

さくらが二階へ上がると、寅次郎は旅支度をしている。

「お兄ちゃん、すみれちゃんの話ちゃんと聞いてあげたの？」

とさくらが訊くと、寅次郎は、

「あの娘が男と泊り歩く様なふしだらな娘だとは思わなかったんだよ」

と言う。

「そんな事言ったって、あの子、子供じゃあないのよ。もう一人前の大人なのよ」

「そいつが女たらしだったらどうするんだ。すみれは騙されてるんじゃねえか」

「それはねえ、お兄ちゃん、すみれちゃんを信じてあげるしかないの。あの子が自分の判断でした事だから、きっと間違いはない。そう思ってあげるしかないのよ」

「難しい事は俺にはわからねえよ。いいよ、すみれの事はおめえ達に任せる」

と言って、寅次郎は鞄を持って立ち上がる。

「その代わりさくら、そいつが本当に真面目な男かどうか、すみれと所帯を持って地道に暮らしていける男かどうか、お前ちゃと確かめてやれよ」

「それだったら、お兄ちゃんが会って、お兄ちゃんの目で確かめれば良いじゃない」

「俺が会ったら何するか分からねえよ」

と言って、寅次郎は階段を降りて行く。

階下に居るおいちゃんは、寅次郎が鞄を下げて降りて来たのにびっくりして、

「おい、何処へ行くんだ」
と訊く。
「きまってらあ、商売の旅よ。おいちゃん、おばちゃん、達者でな」
「行っちゃうのかい、寅ちゃん」
寅次郎は出口で振り返り、
「博、お前さくらと仲良くやれよ」
と言って、すみれの方に目を向けて睨み、そのまま行こうとする。
すみれが寅次郎の所へ走り寄って、
「寅さん、怒らないで、お願い」
と寅次郎に抱きつく。
「怒らねえ、大丈夫」
とすみれを抱いたまま言って、
「幸せになれるんだろうなあ、おめえ」
とすみれの顔を見て言う。
すみれは涙声で、
「うん、きっとなる」
と言う。
「もしならなかったら、おらあ承知しねえぞ、いいな」
すみれは黙って頷く。

寅次郎は振り向かずに去る。

あまりにも格好が良すぎる寅次郎の態度であるが、これが寅次郎の行為の仕方であり、彼の行動原理としての美学である。彼の行為はこのように何らかの交換システムによって既定されている訳ではなくて、仁侠道的な格好良さを表現することが彼の行為の基準になっているのである。彼の行為には如何なる交換システムも関わっておらず、彼の行動原理を支えるのはそうした自らの行為を格好良く見せる任侠道的な美学である。

この「寅次郎かもめ歌」は、ヴィクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』のパロディの様に思われる。勿論ジャン・ヴァルジャンは寅次郎であり、薄幸の少女コゼットがすみれと言う事になる訳だが、ジャン・ヴァルジャンの場合には、彼の行為を支えている原理は、彼を救済したミリエル牧師によって変わった人生観、つまり利他的な行為をすると言う人生観であり、寅次郎の様な任侠道的な美意識によって支えられている訳ではないが故に、ジャン・ヴァルジャンイコール寅次郎と言う訳にはいかないが、この「寅次郎かもめ歌」での寅次郎とすみれの関係は、ジャン・ヴァルジャンとコゼットを彷彿とさせる所が有る。

社会の中に差異を生ぜしめるのは人間のみである。何故ならば、人間のみが時間意識を持っており、また過去と現在との間の差異を差異として理解し得る唯一の生き物であるからである。すなわち差異を差異として捉えるためには、現在を追い越すことによって現在を過去へと追いやる限りにおいてである。未来が自らの下に到来することによって現在となり、そのことによって現在が過去へと追いやられる時に、現在の中に過去とは違った何かが忍び込み、それを過ぎ去った時とは違う何かとして捉えた時に現在の中に差異が生じたと言う事になる。そしてそうした事が起きるのは、人間の何らかの行為によってであり、あるいは自らの時間性の行使によってである。

そして大部分の人間は何らかの交換システムに属することによって、交換システムが生み出す行為連関に組み込ま

れて、その中で互いに連関する差異を産出している。交換システムが生み出す行為連関に沿って自らの時間性を行使することによって生み出す差異は、行為の連なりの溝として、次に続く差異化作用と対応する限りにおいて有効性を持つ物でなければならない。つまり交換システムによって既定される行為連関に沿って生み出される差異は、それに対応するであろう次に続く差異と対応すべき差異であるべきものである。それは交換システム全体の機能に奉仕する限りにおいて何らかの意義を有する差異でなければならない訳であり、自らの自由な在り方の行使としての差異の産出であってはならない。

既に述べた様に、「寅次郎心の旅路」での坂口兵馬や「寅次郎真実一路」での富永健吉は、そうした交換システムが自らを機能させるための差異の産出を、彼等が属する交換システムによって義務付けられる事の重みに耐えかねて、坂口は自殺を計り、富永は失踪する。

それでは交換システムに属して、それが既定する行為連関の中に組み込まれて生きる生き方には自由が無くて、寅次郎の様にそうしたシステムの外に居る人間にのみ自由が有るのであろうか。おそらくそうではあるまい。私は別の著作（『意味の現象学』ミネルヴァ書房）の中で自由とは「〈私〉が存在していることの周囲に、〈私〉が存在していることに基づいて構成された意味秩序へと自らを適合して、ある有り方を確立する自由を意味する。」と述べた。すなわち我々の周囲に有る様々な意味へと行為して、何らかの有り方を築き上げる事が自由である、と言う事である。ここではさらにそのように意味へと行為する事に基づいて、何らかの交換システムに帰属して、その機能に自らの行為を還元することの中に何ら抑圧感を感じない事、すなわちシステムの機能の中に自らを組み入れる事によって、その機能へと自らの行為を還元することに自らの生きる意味を見いだし得る事が自由である。現代は組織の時代であり、殆どの人は何らかのシステムに帰属している訳であり、その組織の中に自らの生き方の意味を見いだし得る事が自由であろう。先に述べた坂口兵馬や富永健吉の場合には、彼等が属していた交換システムの機能に自らの有り方、生き

方の意義を見いだし得ずに、そこに抑圧感のみしか感じなかった訳であり、その場合には彼等は自由に生きているとは言い難い。

現代に要求されているのは、フロムの言う様に「〜からの自由（freedom from 〜）」ではなくて、「〜への自由（freedom to 〜）」であろう。つまり主体的な自由である。それが欠如したならば、坂口や富永の様に組織から抑圧しか感じないだろう。

すなわち現在の乗り越えによって、現在を過去へと追いやり、未来を現在へと到来させる人間の時間性の行使は、交換システムによってその行使の仕方を与えられるならば、差異化によって、つまり現在を過去へと追いやる原動力としての差異の導入によって、未来を到来させる仕方、もしくはその方向性は予め交換システムによって決定されていて、未来の現在への到来は交換システムの機能と相即的である。あるいは交換システムに属している者が、未来を現在化することによる差異の社会の中への導入の方向性は、交換システムの機能の方向性と同じであり、それから逸脱することはありえない。また交換システムによって与えられた、差異化によって現在の過去へと追いやり、それによって未来を現在へと到来せしめる差異化の運動は、常に未来の現在への到来に追い立てられ、自らの未来への行為が残した痕跡としての差異に目を向ける事は無い。人間は常に未来を到来すべく追い立てられて、その結果生じた現在と過去の間に出来た痕跡としての差異に目を向ける事はない。何故ならば、到来すべき未来は既に交換システムによって規定されており、その既に決定された未来を現在へと到来せしめる事が交換システムによって決定された差異の導入なのである。交換システムの中では到来すべき未来は未知なる物ではなくて、交換システムの自己再生的機能に即した未来であり、それはシステム内の時間の循環性に即しているのである。従って、差異化作用は常に反復される訳であり、主体としての人間はそうした差異化作用に目を向けない。

それに対して寅次郎の場合には、そのように未来を現在に到来せしめる事に駆り立てられる事はなく、従って彼が

一〇九

行使する自らの時間的な運動には方向性が無い。

先に引用した「寅次郎心の旅路」の中で、寅次郎が助けたエリートサラリーマン坂口が寅次郎に、これから何処へ行くかを訊ねると、寅次郎は「吹く風に聞いてみる」と、ちょっとキザな答え方をするが、これが寅次郎の行為の仕方であり、時間性の行使の仕方である。つまり寅次郎も交換システムに属している人々と同様に自らの時間性を行使することによって、未来を現在へと到来せしめ、現在を過去へと追いやり、そのことによって現在と過去の間に何らかの差異を導入するが、その仕方は方向性を持たない。

彼も勿論交換システムを何らかの形で利用するが、その場合に彼が利用する交換システムに属している人間との間に何らかの行為連関を形成して、その交換システムを利用する目的を達成しようとするのであるが、その限りにおいて彼の時間性の行使としての差異化には方向性が有るが、その方向性には連続性が無く、差当りその交換システムを利用して、何らかの目的を達成するが、その先は言わば風の吹くまま気の向くまま、であり、行き当たりばったりの行為の仕方である。

そうした寅次郎の行為の仕方、あるいは時間性の行使の仕方が、彼に様々な交換システムを開示することを可能にする。先に引用した三つの作品の中で、「寅次郎恋歌」では彼は旅の一座との出会いを経験し、「寅次郎あじさいの恋」では有名な焼き物師と出会い、また「寅次郎かもめ歌」では薄幸の女性であるすみれを通して定時制高校と言う交換システムに出会う。そうした出会いは寅次郎が時間性を行使する仕方が、何らかの交換システムによって規定されておらず、従って彼が生み出す差異はただ現在を過去へと移行させた結果生じたものであって、方向性を持った未来を何らかの緊急性を持って、また連続的な方向性を持って絶えず現在へと齎らす事に依る差異の産出ではないが故に可能なのである。つまり寅次郎がそのように多様な交換システムに出会い、それらと関わる事が出来るのは、彼の行為が何らかのシステムによって規定されておらず、従って自らの行為を何らかの交換システムへと還元する必要性も無

いからである。

大部分の人間の場合には、その行為の仕方、意味へと行為する仕方は或る方向性によって既定されていて、それはシステムの外へと繋がり、再びシステムへと帰還する循環性を持っており、従ってそうした行為連関の、あるいは時間性の行使としての差異の産出連関に沿った出会いしか無く、寅次郎の様な多様なシステムとの出会いは望むべくもないだろう。

それでは大部分の何らかの交換システムに内属している人間には自由が無くて、寅次郎の様な行為の仕方にのみ自由が有るのだろうか。先程自由とは意味への行為であると既定したが、それは社会学的な既定ではないので、ここでの文脈では不充分な既定であると言わざるを得ない。

フロムは先に引用した『自由からの逃走』の中で封建時代の固定的な階級制度が崩壊した結果、人間の意識に自由の観念が生まれ、そして人間が長い歴史的過程の中で獲得した自由が重荷になって、それを捨てて何か巨大な組織に委託しようとした。その結果生じたのがヒットラー率いるナチスドイツであると言う。

「寅次郎心の旅路」に登場するエリートサラリーマンの坂口や、「寅次郎真実一路」に登場する富永等は、逆にそうした巨大な組織である交換システムからの抑圧に耐えかねて自殺しようとしたり、失踪したりしたのであるが、それではそうしたシステムに属さない生き方、つまり寅次郎の様な生き方の中にしか自由は無いのであろうか。

自由とは、ここでは社会を構成している意味への行為が、社会の枢軸を成している交換システムへと還元される場合に、交換システムが生み出し、交換システムを軸として社会を循環する差異の作用の中に身を曝し、システムの絶えざる自己再生機能としての絶えざる差異の産出、あるいは行為連関の産出に身を置いて、その流れに沿って自らの時間性を行使する事の中に有る。すなわち自由とはシステムが有する自己再生機能としての絶えざる差異の産出の循環を生きる事、そこに自らの時間性を行使する主体性を行使することである。

一一一

寅次郎の場合には、その都度の意味への行為に方向性が無いが故に、つまり交換システムによって規定された行為を為さないが故に彼が自由であるとは言えないだろう。もしそんな事が言えるならば、ホームレスの小父さんが一番自由であると言う事になってしまう。しかし誰もホームレスの小父さんが一番自由だとは思わないだろう。何故か。恐らくホームレスの小父さんは社会への関わりを欠いていて、社会の自己創造に何ら貢献していないからであろう。だから自分が使う時間が豊富に有るほど、その人は自由であると言った事は言えない。

交換システムに属している人々はそれが与える行為連関を遂行することによって、何らかの形で社会の自己創造に貢献している。寅次郎の場合は既に述べた様に（「寅さんの社会学」『徳山大学論叢第四十九号』）、社会の中に存在しない役割を自らの行為において創造する場合が有る。ただ寅次郎の場合には、制度的に何らかの役割を社会の中に創造するのではなくて、その役割を自ら演ずる必要性の有る状況に直面した場合に、そのような役割を創造していると言う自覚なしに、自らの行為においてその役割を創造する訳だから、その役割は寅次郎が演ずるのをやめたらその役割は社会から消失する。その意味で寅次郎が演ずる役割創造は制度的に社会の中に或る役割を確立する事に比べたら、社会への貢献度は低いと言える。しかし彼は如何なる拘束無しに次々と色々な役割を自らの行為において創造している訳で、その意味で彼は社会へと貢献しており、社会と自分との絆を維持しているのである。

【註】映画からの引用で、ちくま文庫版の脚本集からの引用はその旨を示してある。それ以外は直接ビデオから起こした物である。また参考文献は本文の中で示した。